英雄フィアナの迷宮探索

雑魚王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

己が大成することを信じて疑わない、小人族の幼女フィアナ・グローリー。

架空の女神と同名を持つ彼女がオラリオに降り立ち、一つの舞台の幕が上がる。

幼女と幼女がキャッキャウフフしながら迷宮を探索するハートフル・ストーリー。小さき百合の花が咲き乱れる!!

目次

第一章　揺籃の英雄
プロローグ ―― 1
一話　ギルドと神 ―― 5
二話　神の恩恵と突撃 ―― 12
三話　団欒と英雄譚 ―― 18
四話　一週間目の出会い ―― 20
五話　大激闘 ―― 24
六話　換金 ―― 28
七話　一ヶ月の絆 ―― 32
八話　パーティと【ファミリア】 ―― 37
九話　そして二人は本気で向き合う ―― 43
十話　殴り込み ―― 47
十一話　交渉とは、とりあえず強気にふっかけるもの ―― 53
十二話　『明日』は誰かに手を引かれて行くものじゃない。自分の足と意思で行くものだ ―― 62
十三話　後日談 ―― 66
第二章　闇の落とし子
十四話　第四階層 ―― 74
十五話　捨てる神あれば拾う神あり ―― 78
十六話　可愛いは正義 ―― 81

第一章　揺籃の英雄

プロローグ

　迷宮都市、あるいは世界の中心とも言われる大都市オラリオ。ある日、活気に満ちたその街に、一人の少女が降り立った。

　パチクリとした大きな目。丸みを帯びた頬。見事な童顔と、百二十C（セルチ）にも届かぬ矮躯。十四という年齢を考えて尚小さい少女はそれもその筈、成人後も子供のような見た目と身体能力しか持てない小人族（パルゥム）であった。

　朝焼けにキラキラと瞳を輝かせ、金色の髪を風が揺らす。子供らしい顔に勝気な笑みを浮かべ、フィアナ・グローリーは堂々と宣言する。

「ここがオラリオね。将来、史上最高で最強で最美の女英雄が誕生したと言われるようになる地！　はははははは！　そこのあなたたち、感涙に咽び泣くがいいわ！　たった今、空前絶後の英雄譚の幕開けに立ち会えたのだから!!」

　朝日が昇ったばかりの時間であるがために、人影の少ない大通りにフィアナの大声は良く轟いた。

　甲高い声に反応した人々は、総じて小さな子供を見守るかのような暖かな笑みを浮かべ、手を振って応援した。フィアナも『未来の英雄』を自負するが故に、気前よく手を振り返（ファンサービス）しながら駆け抜け、急ターン。開店準備を進めていた食堂の女主人を捕まえ、見上げながら問うた。

「ねえ、ギルドってどこにあるのかしら？　っていうか何にも知らないから、オススメの宿屋から【ファミリア】の加入方法まで全部教えて欲しいのだけど！」

　恰幅の良い女主人は、気前よく答えてくれたが、それはそれとして疑問は湯水のごとく湧き出す。寒風吹き荒ぶ早朝の路地に、長時間立っているわけにもいかず、質疑応答は女主人が経営する酒場【豊穣の女主人】の内部で行われることとなった。

　ミア・グラント。そう名乗ったドワーフの女主人は、太い腕で大樽を二つ三つ抱え上げてしまう剛力の持ち主だが、しつこく問うフィア

ナを見捨てないのだから根は善良なのだろう。あるいは、フィアナの小人族としての外見が、女主人の厚意を引き出したのやもしれない。
「で、嬢ちゃん。あんた、どんな【ファミリア】に入りたいんだい。ここにゃあ色んな神様がいるからね、それだけ【ファミリア】にも種類がある。自分に合ったとこじゃないと後で苦労するよ」
「私はウルトラスーパーな英雄になるんだから、探索系以外ありえないわ！　でも、そうね……出来れば、既にある【ファミリア】に入るんじゃなくて、一から神様と【ファミリア】を作っていきたいわ」
「ほう。そりゃまたどうしてだい？　そのちっこい頭でも、派閥を設立するのが大変だって分かってるだろう」
「そんなもん決まってんでしょ。小人族だからって見下されるのが嫌だからよっっ!!!
　ヒューマンは賢しらぶって馬鹿にするし、獣人は身体能力の低さを笑うし、自称高貴なエルフ様は気取った言い回しでこき下ろすし、ドワーフは職人風吹かせて相手にもしないし！」
　過去の因縁を思い出し、遂には「ムキィィィィィ!!」と歯軋りしながら地団太を踏もうとするフィアナ。しかし、酒場の椅子に座った彼女の足はプラプラと宙を揺れるだけで、床には到底届かなかった。
「どいつもこいつもムカつくのよ！　だから、ぜーんぶ見返してやるの！　手始めに最強の冒険者とか言われてるやつを引き摺り下ろしてやるんだから！　その顔に鼻糞擦り付けてやる!!」
「あっはっはっはっは！」
　フィアナの目標は荒唐無稽極まる。しかし、だからこそ面白い。若くて、しかも冒険者なのだ。これくらいの大言壮語を吐けずして何とする。
　そう言わんばかりにミアは大笑した。
　子供だと取り合わないのではない。無謀だと嘲ることもしない。
「それでこそだ」と評価する。
「あの『猛者』に鼻糞を付けるか。良い目標だねぇ、嬢ちゃん。思う存分、顔面が鼻糞塗れになるくらいやってやりな!!」
「ふふん！　もちろんよ、この私に二言はないわ！

あなたは見る目があるようだし、『大英雄フィアナ・グローリーが絶賛した味』って売り出すことも認めてあげる!!」
「はっはっは！　嬢ちゃんが本当に英雄になれたときには、是非ともその文句を使わせてもらうこととするよ」
「しかし」と、ミアは顔色を曇らせた。
フィアナもお転婆ではあるが、馬鹿ではない。良くない話の前兆だと察し、心を落ち着かせ、聞く姿勢を整える。
「第一希望の一から派閥を作り上げるってのはちょいと厳しいかもしれないね。オラリオには、そりゃあたくさんの神様がいるけどさ、大概は多かれ少なかれ眷属を抱えてるもんさ。
下界にいるのに【ファミリア】を結成していない神なんて、それこそ降臨したばかりの神だろうさ」
つまり、神の降臨とフィアナのオラリオ到着。因果関係のない二つの事象のタイミングがぴったりと合致していない限り、少女の希望が叶う確率は甚だ小さいのだ。仮に条件に該当する神物（じんぶつ）が居るとしても、広大な迷宮都市からたった一柱を見つけ出すことが至難であるとは言うまでもなかろう。
けれど、フィアナは不敵に笑う。ミアの忠告を理解した上で、不安を笑い飛ばすのだ。
「だから何よ？　どれだけ難しくてもね、そんなのは夢を諦める理由にはならないの。こちとら、ハイパーデラックスな英雄になるためにオラリオに来たんだもの。無理難題は乗り越えてナンボのもんよ！
諦めなければ、夢はいつかきっと叶うと信じているのだから!!」
ミアは数舜呆気に取られ、そして小さな英雄未満を褒め称える。
薄弱とした意思では、何一つ成し遂げられやしない。フィアナが大成するかどうかは誰にも分からない。けれど、彼女の意思の強さだけは本物だ。ミアは、そに光を見出した。
「よく言った！　今日の晩御飯はウチの店で食べていきな。特別サービスしてあげるよ」
「ありがとうミア！　大好き！」
おすすめの宿屋に武具店。ギルドの場所と道順。その他にも訊く

べきことは、軒並み訊き終えた。星が弾けるような、眩い笑顔を残して、ピューンとフィアナは走り去る。
出会いから別れまで、一貫して嵐の如き少女である。ミアをして、ペースを握られっぱなしだった。
二人の会話を面白げに観察していた店員らに檄を飛ばすと、ミアも開店準備を再開する。
かつて団長を務めた【ファミリア】の主神に祈る心はないけれど。フィアナと同じ名前を持つ女神にならば、彼女との出会いについて、感謝を捧げても良いと思える。
食材を力強く刻みながらも、ミアの顔は柔らかく綻んでいた。

一話　ギルドと神

「わーたーしーがー、やってきたぁぁあああ!!!」

ギルドの開店時間と同時。来客用の扉の鍵を開けた途端、凄まじいハイテンションで飛び込んでくる少女が一人。尊大なまでに漲る自信も、しかし幼げな容姿のおかげで生意気とは取られない。

癖は強いが、可愛らしい少女をギルドの職員たちも暖かく歓迎する。

「当ギルドの職員、エイナ・チュールと申します。本日のご用件は如何なものでしょうか？」

美しい顔立ちと、細長く尖った耳はエルフの特徴だ。ただ、エイナの耳はエルフにしては若干短いため、混血（ハーフ）の可能性もある。

自種族に高い誇りを持つ純血のエルフは、他種族の血を引く彼女を蔑むかもしれないが、フィアナはそういった感情を持たない。小人族というだけで蔑まれてきたがゆえに、その痛みを知っている。

自分がされて嫌なことは、相手にもしない。当たり前のことだ。

なお、色眼鏡で見て侮蔑することは無いが、腹の立つ相手に仕返しすることは割と頻繁にあったりする。

「冒険者になりたいんだけど、まだ無所属（フリー）なの。だから、まずは【ファミリア】に加入しなきゃなんだけど、できれば一から派閥を作りたいのよね。まだ眷属が零で、けれど眷属を募集している。そんな神様に心当たりはある？」

ギルドは冒険者を支援する組織であり、オラリオの統治機関でもある。そのため、彼らの情報網は都市髄一だ。「条件に合う神様を見つけたいんなら、まずはギルドで訊いてみるといい」と、ミアも太鼓判を押した。

その評判を裏切らず、エイナはニッコリと笑いながら色良い答えを唱えた。

「はい。それなら先月降臨されたばかりの女神さまが一柱いらっしゃいます。良ければ、当ギルドが仲介に立ちましょうか？」

「ええ、ええ！　是非お願いしましょう！」

善は急げ。どうやら神との対談はこれから行われるようで「お時間の程はよろしいでしょうか」と尋ねるエイナに、フィアナは即座に頷いた。【ファミリア】に加入していない、仕事もない、今夜の宿も取っていない彼女の予定表は純白に輝いているのだ。

『神との出会い』、あるいは『【ファミリア】の結成』か。白雪の如き純白を汚す予定も、フィアナには輝いて見える。

同僚に仕事の引継ぎを終えた、エイナの先導に従い、フィアナはまだ見ぬ神との逢瀬に胸を躍らせた。

「へえ、じゃあフィアナちゃんは冒険者になるためにオラリオにやってきたんだ？」

「そう！　そして『フィアナ』と聞けば、誰もがかつて小人族が信仰していた空想の女神じゃなく、私を思い浮かべるようにしてやるわ!!」

円滑なコミュニケーションは受付嬢の必須技能だ。道中も息苦しい沈黙が下りることはない。コツコツと表通りの石畳を靴底で叩きながらエイナが話題を振り、フィアナは景気よく答えていく。

裏表が無く、はっきりとした性格のフィアナにエイナは好印象を持ち。非力な小人族の少女が冒険者になると言っても、決して馬鹿にはせず、心配と激励を贈るエイナに、フィアナも気を良くしていた。

軽い自己紹介を終えた事、そして年齢が近い同性ということもあり、二人の会話は弾む一方である。

「エイナは、私の英雄叙事詩の序章に登場する【運命の導き手】ってところかしら？　神と人の縁を結び、物語の幕を開けさせた、昔の英雄譚の精霊ポジションね。光栄に思いなさい!!」

「うーん。精霊様を敬うエルフ的には、嬉しいような恐れ多いような……」

「立身出世はこの世の春でしょ！　遠慮はいらない。堂々と胸を張ってればいいのよ！　文句を言ってくる精霊がいたらね、そのおっぱいでばい～んって撥ね飛ばしてやりなさい！」

「ふふっ。そんなときは来てほしくないかな。私のほうも結構痛そうだし」

二人の会話を聞いた。通りすがりの男性ヒューマンがエイナの胸

部を見て顔を赤くすれば、「フシャー」とフィアナが威嚇して追い払う。故郷から持参した、愛用の手斧（ハンドアクス）を振り回すので、かなり物騒だ。
「こーら。街中で刃物を振り回さないの。危ないでしょ？」
コツンと軽く拳骨を頭に落とされ、フィアナは上目遣いでエイナを見遣る。儚く、庇護欲を誘う。母性本能を痛烈に刺激され、要求の全てを飲んでしまいたくなる。
己の容姿を自覚した、あざとい仕草に、さしものエイナと言えどたじろいだ。
「でもぉ。男は野獣なのよ？　油断も隙もあったものじゃないわ。エイナは綺麗な女の子なんだから、言い寄ってくる男も多いでしょう？
中には強引な蛮族（バーバリアン）もいるでしょうし、いざという時のために体を鍛えておいたほうがいいわ。ナニがあってもナニを蹴り潰したり、握り潰せるくらいにはね」
幼子の口から吐き出される、世の男にとっての死刑宣告。一切の容赦が介在しない、残酷なる刑罰に、周囲の男たちは一斉に距離を取った。提案を受けたエイナも苦笑いを浮かべることしかできない。
何はともあれ、楽しい雑談が時間の経過を忘れさせてくれた。エイナはある宿屋の前で足を止め、手招いた。
「例の神様は、ここに一か月前から泊まっていらっしゃるの。心の準備はいい？」
「いつでもオーケー！　常在戦場。私に隙なんてありはしないわ！
――って、ちょっと待って！」
宿屋に入らんとするエイナに、慌ててフィアナは『待った』を掛けた。
エイナに何か非があったわけではない。ただ、これがまさしく物語の始まりなのだから、彼女一人に扉を開けさせることは相応しくない。
エイナが『運命の導き手』であるならば、フィアナは『未来の英雄』だ。スタートは二人一緒であるべきだろう。
「どうせなら一緒に開けましょ？」
「そうね。そうしよっか！」

両開きの扉に、エイナは右手を、フィアナは左手を押し当てる。二人は息を合わせ、そして――

「たのもー！」

「それはちょっと違うかな!?」

時間帯を考え、声量を抑えつつも、二人は仲良くボケとツッコミを果たして入店する。姦しい声に誘われ、カウンター奥からニョッキリと顔を出した主人に、エイナが用件を過不足なく伝えていく。

曰く、一人の少女が【ファミリア】を探している。

曰く、彼女の希望が、宿に泊まっている女神様に合致する。

曰く、両者の相性を見るために訪問した。

しかし、時間帯を考えれば、部屋を訪ねることは不作法である。さりとて、一階にまで足労頂くこともまた不敬となりかねない。

故に、女神の対談場所を宿泊部屋とするか、一階とするか、その旨を尋ねてきて欲しいのだ、と主人に依頼した。

要点を纏め、かつ順序立てた説明と依頼に感心しつつも、少し手持無沙汰であったフィアナは宿屋の一階を見渡してみる。

まず入り口付近にはカウンターが、その奥には調理場が設えてあり、反対側の日差しが差し込むスペースは食堂だ。食堂からは、どうやら御手洗（トイレ）いに通じているらしい。食堂がかなり広いスペースを取っているため、他には何もないが、カジュアルな内装はフィアナ好みだ。掃除も行き届いているらしく、清潔感が保たれている点も、年頃の乙女感性的にはグッドである。

この分ならば、階段を上った先にある宿泊部屋にも期待できる。下界に降臨したばかりとは言え、流石は女神が一か月間も贔屓する宿屋だ。庶民的でありながらも、決してレベルは低くない。

「どうやら一階（こちら）に降りて来られるようで。食堂にてお待ちください、とのことです」

上階から戻った店主の伝言を聞く限りでは、旗色は悪くない。傲慢な神ならば、人の子相手に自ら足を運ぶことを良しとしない。これから会う神が、主神（おや）となるかもしれないフィアナからすれば、それだけでも朗報である。

店主に礼を告げ、エイナと共に食堂の手近な椅子に腰掛ける。
「そういえば、エイナは例の神様と面識があるの？」
「ちょっとだけ、だけどね。冒険者を志望しているけど、加入する【ファミリア】が見つからなくて困っているような子がいれば教えて欲しい、って頼まれたのは私だもん。おおらかで、凄く優しそうな女神様だったよ」
「これは期待大ね。待ち遠しくてワクワクするわ！」
フィアナが女神の外見や性格をあれこれと想像すること数分。トッ、トッ、トッ、トッ、と気品すら滲む足音が上階から一階に近づいてくる。
この足音の主こそが、待ち侘びた女神であると、小人族の少女は直感する。
ドクン、ドクン、ドクン、と煩いほどに心臓が高鳴り、体感時間は須臾が永遠とも思えるほどに引き延ばされる。その果てに現れたのは、まさに『女神』であった。
「ごめんなさい。待たせちゃったかしら」
腰ほどにまで伸びた翠髪。優しさと暖かさを感じさせる金眼。そして、圧巻の胸部装甲。
さながら『母性』や『包容力』という概念が服を着て歩いているかのような神物（じんぶつ）の登場に、フィアナのテンションは急上昇する。エイナが好感を抱く神が悪神だとは思っていなかったが、これは予想以上だ。運命すら感じてしまう。
「私は大地の女神レイア。私の【ファミリア】の初眷属候補が来てくれたって聞いて、本当に嬉しいわ」
エイナとフィアナは一度立ち上がり、女神に席を勧める。彼女が腰を下ろすことを確認してから、再び座した。【ファミリア】の結成すら達成されていない女神といえど、神は神。無礼な真似は出来ない。滲み出る、優れた神格（じんかく）に感化され、不敬を働きたくないという本心もあった。
「そう固くならないで。一人はこれから私の家族になるかもしれない子で、もう一人はその縁結びを担ってくれるのだから、もっと肩を楽

にしてちょうだいな」
「じゃあそうさせてもらうわね!!」
初対面の人どころか、本物の女神を前にして気安い態度を取れるはずがない。下界の住民に刷り込まれた常識を、しかしフィアナは平然とぶち破る。
瞠目を隠せないエイナと、目を細めるレイア。一人と一柱の反応に気を良くし、背筋を逸らさんばかりに胸を張り、堂々と名乗りを上げた。
「私はフィアナ！　フィアナ・グローリーよ。歳は十四、故郷の里では木こりをやっていたわ。オラリオには、最強で最高の英雄になるために来たの。
『フィアナ』と聞けば誰もが私を思い浮かべるくらいの冒険譚を綴ってやるのだわ!!」
「まあまあ。それは良い夢ね。でも、最強って色々あると思うの。あなたはどうやって皆にそれを認めさせるのかしら？」
「とりあえず、今オラリオで最強の冒険者って呼ばれてるやつをボコボコにしてやるわ。気絶したそいつの顔に鼻糞を擦り付けてやれば、私の勝利を疑う馬鹿もいなくなるでしょ？　あとは、そうねー。お伽噺に出てくる『黒竜』！　あれの討伐を達成するか、もしくは調教（テイム）するのもいいかも。竜騎士（ドラグーン）ってカッコよくない？」
現在の都市最強は【フレイヤ・ファミリア】団長、猪人のオッタルという名の大男だ。獣人の特性でもある身体能力を活かし、大剣を縦横無尽に振り回す大戦士。
対するフィアナは、非力な小人族の少女である。しかし、種族差を覆し、冒険者としての位階も覆し、泥を付けてやるという宣言には一切の迷いがない。
打倒オッタルという目標だけでも際立つが、黒竜に対する姿勢も無視できるものではない。
人類とモンスターは千年以上も昔から相争ってきた。その禍根は根深く、モンスターを従える調教師（テイマー）に対して、『怪物趣味』と罵倒を浴びせる者も少なくない。

にも係わらず、フィアナは女神とギルドの職員の前で、最強のモンスターの一角を調教（テイム）する意思を見せた。その度胸は、もはや心臓に毛が生えているだろうレベルだ。

だからこそ、女神の琴線に触れる。『未知』を求めて下界にやってきた神には、『賢い生き方』を捨て置き、輝く意思に従って邁進する少女がこの上なく好ましいのだ。

「ええ、そうね。とっても素敵だと思うわ。もしよかったら、私も黒竜に乗せてもらえる？　空飛ぶ竜の背中から見る景色って、未来永劫忘れることのない絶景でしょうから」

「もちろんいいわよ。私は宝物を独り占めするような、みみっちい女じゃないもの」

「ありがとう。そのお礼にっていうのも変だけど……フィアナちゃん、私の【ファミリア】に入ってくれないかしら？　あなたともっと話したい、家族になりたいの。出会ったばかりだけど、この気持ちに嘘はないわ」

「こっちこそお願いするわ！　小人族でも、女でも、子供でも馬鹿にしない神様なんて、探したって簡単に見つかるわけない。オラリオに到着したその日に、初めて顔を合わせたあなたがそういう神様であったことは運命に違いないもの!!」

斯くして一人の少女と、一柱の女神との運命は交わった。順調すぎる進行に「これ、私がいる必要あったのかな……？」と、ハーフエルフの少女がつい漏らした疑問は、【ファミリア】結成に喜ぶ当事者らの耳には届かない。

二話　神の恩恵と突撃

トントン拍子に話が付いたことで、その場を辞するエイナ。仲介という役割を果たせのか、と首を捻る彼女を見送ると、フィアナたちは上階の宿泊部屋へと移動した。神と子が家族（ファミリア）となるための儀式を行うのだ。

「じゃあ上だけでいいから、服を脱いでベッドに寝てくれる？　恩恵を刻むのは背中だから、うつ伏せにね」

天界から下界に降りた神は、下界という遊戯（ゲーム）を楽しむために自分たちの全能の力を封じた。『神の恩恵（ファルナ）』とは、そのルールの数少ない例外だ。

主神たる神の血を、眷属に与え、【経験値（エクセリア）】を汲み上げ成長を促す。ランクアップを重ねるごとに飛躍的に能力が向上し、ときには《魔法》や《スキル》などの強大な力の発現をも可能とする。文字通りの神の恩恵である。

【神の恩恵（ファルナ）】は主神が己の血を用いて、眷属に刻むため、視覚化された主神と眷属（親子）の繋がりとも言える。

「初めてだから、少し緊張するわね。……じゃあ、行くわよ」

「覚悟はいいか、私は出来てる!!　……うぴゃ!?」

フィアナは格好つけて【神の恩恵】を受け入れる構えを見せたが、背筋を伝う細指の感触に悲鳴を上げた。服を脱いだ肌寒さもあり、ブルリと体を震わせる。

「はい、もう終わりよ。共通語（コイネー）で写してあげるから、フィアナちゃんも確かめてみなさい」

ポンと背中を叩くことを、一仕事を終えた合図とし、レイアは【神の恩恵】を写し取った羊皮紙を手渡す。

刻まれることも、見ることも、フィアナにとっては初めての【神の恩恵】だ。翻訳済みとは言え、読み取り方に迷う。数度視線が上下に流れてから、漸く正しく理解し、今一度しっかりと目を通した。

【フィアナ・グローリー】

Ｌｖ１
力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｉ０
敏捷：Ｉ０
魔力：Ｉ０
《魔法》
【宝石魔術】
・魔力を込めた、宝石などの鉱石を触媒に発動。
・込めた魔力の多寡により威力増減。
・触媒に宿る思念により効果変動。
【　】
《スキル》

「ふぉおおおお!!　魔法、魔法がいきなり発現してる！」
フィアナの【ステイタス】は、【神の恩恵】を刻んだ直後の初期段階だ。《魔法》を行使する《小人族》の冒険者も探せばいるだろうが、最初から魔法を得ている者は極めて少ないはず。「流石は未来の英雄たる私ね！」と自画自賛し、フィアナは天井知らずに興奮していた。
しかも、彼女の《魔法》はただの《魔法》ではない。【宝石魔術】だ。実にエレガントかつ高貴な響きであり、名前だけでも拍が付くというものだ。
「おめでとう。これは将来有望ね、私も祝福するわ。だけど、【宝石魔術（それ）】は他の人には話したらダメよ？　好奇に満ちた神々に目を付けられちゃうもの」
「分かってるわ。大魔導士キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグの代名詞だものね。この千年間、彼以外に保有者の見つからなかった魔法なのだし、露見すれば悪目立ちや顰蹙、嫉妬が確定する。零細ファミリアには過ぎた難事ね」
しかし、それはそれとして嬉しく思う気持ちに嘘はない。過去の英雄と同じ《魔法》を使える興奮といったら、天にも昇る思いだ。まる

で時を越えて、かの英雄の後継者に選ばれたと錯覚してしまいそうだ。
叫び出したい気持ちを抑えるが、しかし口端がニマニマと蠢くことまでは抑えきれない。
「【ファミリア】の結成申請と、冒険者登録はギルドで受け付けるって、酒場の店主から聞いたわ。ねえねえ、レイア様。早く行きましょ！」
「もう、そんなに急がないの。ギルドは逃げたりしないわよ？」
上着に袖を通しつつ、靴を履き、主神の手を引く。
フィアナの慌ただしい様子に、レイアも苦笑しつつも満更ではない。部屋を出て、宿屋の主人に挨拶すると、一人と一柱はギルドへと向かう。笑いの絶えない会話を交わす二人は、まるで親子のよう。事実、二人は既にそれだけ互いに信頼を向けていた。
レイアは億年を超える神生から、フィアナの天真爛漫な人柄を見抜き。フィアナは、子供ゆえの鋭い感性を以てして、レイアの母性を甘受する。
レイア／フィアナが主神／眷属で良かった、と彼女たちは自身の幸運を喜んだ。
「はい。【ファミリア】の結成申請と冒険者登録はこれで完了です。お二方ともお疲れさまでした」
ギルドの入り口から建物内部を見渡し、発見したエイナに声を掛け、彼女の指示に従って書類を書き進めたり、説明を拝聴すること二時間強。フィアナはオラリオに来るまでの道中に、レイアはこの一ヶ月の間に予習は済ませていたため、小難しい単語が飛び交う時間を苦も無く突破した。
美人受付嬢の労いを受け取りながら、眷属は冒険の始まりに胸をときめかせ、主神はより広い視野で眷属との今後の生活全般についての計画を立てる。
「つきましては、冒険者の初心者用セットを当ギルドで販売していますが、購入されますか？」
「セットの内訳を教えてもらえる？」
「ではサンプルをお持ちしますね。口頭での説明より、現物を見た方

が良いでしょうから」
　冒険者となったのはフィアナ。当然、初心者用セットとやらを購入した場合、その使用者はフィアナとなるのだが、エイナが判断を求める相手はレイアであった。
　まるで『親の意に反して、勝手に商品を購入しようとする子供』と見られているかのよう。フィアナは子供扱いされている気がしてならない。実際、十三歳の子供なので間違いではないのだが、冒険者の身分を得たのに子供扱いされることは不服だ。
　そういう背伸びをしたがる姿勢や、頬をプクリと膨らませる反応が、子供と見られる原因なのだが、本人に自覚はない。
「こちらがセットです。値段は八〇〇〇ヴァリスほどになりますね」
　戻って来たエイナが机の上に広げた物は、軽鎧一式とナイフが二振り。そして小さなポーチが一つ。ナイフは戦闘用と解体用とで用途が分かれ、ポーチの中には小道具が詰められていた。
　主従はそれぞれ品を手に取り、矯めつ眇めつ眺めていたが、コテンと首を傾げる。
「品質微妙じゃない？」
「ねえ、エイナ。これで８０００は取り過ぎよ。５０００で売ってる店があってもおかしくないくらいだもの」
　大地母神のレイアは豊穣を司る。何を以て豊かとするか、貧しいとするか、その境を見極める確かな審美眼も彼女の領分だ。神の力が封じられた状態であろうと、物の質を吟味する程度は造作もない。
　眷属のフィアナは都会に出てきたばかりの田舎者とは言え、故郷では歴戦の木こりである。木を切り倒すためには森に入る必要があるが、森とは人の領域ならざる危険地帯だ。地滑り、倒木、遭難、獣やモンスターとの遭遇など、危険が跋扈する。危険を退けるために入念な準備を重ねる姿勢は、ダンジョンに挑む冒険者のそれにも近しい。ポーチの中身の雑品は、フィアナも故郷の森で使っていた。
　その経験から断言できる。冒険者の初心者セットは、明らかに適正価格を超過（オーバー）している、と。
「申し訳ありません！　ギルドの上の人がお金にがめつくて……」

エイナが勢いよく頭を下げれば、レイアも「あぁ」と得心がいったように頷く。
ギルド長ロイマン。諸悪の根源は、欲望に溺れた、金の亡者だ。端正な容姿が特徴のエルフとは思えぬほどに、でっぷりと腹の肥えたロイマンは、仲間意識の強い同族からさえも侮蔑される。
その渾名が――
「――ギルドの豚ね」
「なぁに？　ギルドって豚を飼ってるの？　しかも上層部に置くなんて変わってるわねー」
レイアはオラリオで一ヶ月情報収集をしていたから、ギルドの汚点を知悉する。
だが、フィアナそうではない。故郷からオラリオまでの道中に勉強したとはいえ、学ぶ対象は【迷宮（ダンジョン）】が主だ。都市の統治機関とはいえ、一組織でしかないギルドの内情にまで探求の矛先を向けてはいなかった。
【ギルドの豚】がまさかエルフを指すとは思わない。ゆえに、ナチュラルに鬼畜外道な発言が飛び出す。
「どうせならケバブとかにしない？　串をぶっ刺して、火で炙りながら表面のお肉を削いでいくの。美味しいわよ？」
「ぶっ!?　んーっと、ちょっとそれはやめた方がいいかな。お腹壊しそうだし」
「エイナがそう言うならやめるけど……でも、もしやりたくなったら言ってね！　私、お肉焼くのは大の得意だから！」
引き気味に頷くエイナと、事情を知り笑いを噛み殺すレイア。
二人の反応を不思議に思いつつも、フィアナは一旦捨て置いた。彼女の心は目下、迷宮へと向かっているのだ。肉料理は好きだが、今この時はそれ以上に大冒険に心惹かれる。
「もうお昼近いけど、フィアナちゃんは迷宮に行くの？」
「ええ。ちょこっと潜ってすぐ出るつもりだけど。そしたら、レイア様！　一緒にお昼ご飯食べましょ!!」
「楽しみに待ってるわ。でも、場所はどうしようかしら。あの宿屋も

いいけど、それとも別のレストランに行く？」
「ん、宿でお願い！」
「はい、それじゃあ冒険頑張ってらっしゃい」

三話　団欒と英雄譚

「それでねそれでね！」

ギルドを飛び出した後、フィアナは道すがら雑貨店や武具店でアイテムと装備品を購入。ラインナップは、ギルドの初心者セットとほぼ同一であるが、値段は五〇〇〇以下。値切りに値切り、驚異の四二〇〇ヴァリスだ。消耗品の増量サービスまで取り付けたので、実際には更に値切ったとも言える。

そして、意気揚々と迷宮に乗り込み、第一階層でゴブリンを相手に大立ち回りを演じてから帰還を果たした。宿屋の食堂とレイアと再会し、昼食を取りながら、己が冒険譚を語る。

「ゴブリンが殴りかかって来たから、盾で受け止めたの！　ドンってくる衝撃を、足を踏ん張って堪えてカウンターの斧をお見舞いしてやったわ！　血沸き肉躍る攻防、これこそ戦いの醍醐味よね!!」

ゴブリンと新人冒険者の一対一（タイマン）に、血沸き肉躍る要素はないが、そのツッコミを入れるのは無粋だ。如何な英雄もそこから始まった。勝利を祝いこそすれ、侮ることなどあってはならない。

「ヒュウ！　小人族の嬢ちゃんカッコイイねぇ！　もっと聞かせてくれぇ！」

食堂には、フィアナたち以外にも食事を摂っている宿泊客が数名いる。彼らの囃し立てる歓声に応え、小さな女戦士は謳い上げる。

「名づけるなら、【英雄フィアナの迷宮探索】ってところね！　今はまだ序章（プロローグ）しかないけど、完成したら本にして広めることも許可してあげるんだから！　老後は吟遊詩人で安泰よ!!」

「あっははは！　そりゃあいい！」

髭面の男が、楽器の奏でに歌を乗せる吟遊詩人へ転職するとはこれ如何に。外見的なギャップが凄まじい。だから面白い。件の男は手を叩いて笑い、仲間内で騒ぎ立てる。

無茶苦茶な言動を発しても負の感情を抱かせないのは、フィアナの人柄ゆえのことだ。天真爛漫にして純真無垢。相手によって態度を変えることもなく、誰に対しても平等に接することのできる、稀有な

人間性。よほどの悪人でない限り、彼女に悪感情を向けることは難しい。

「レイア様！　午後も冒険して来るから、宿屋(ここ)で待っててね。もっとすごいお土産(冒険譚)を持って帰ってきてあげる！」

「ありがとう。でも、無茶だけはしないでね。フィアナちゃんが無事に帰って来てくれることが、一番嬉しいんだから」

「英雄は女の子を泣かせない。涙を拭いてみせるのよ。

だから、未来の大英雄の私も、レイア様を悲しませることは絶対にしないわ！」

英雄譚はハッピーエンドで締め括るべし、とはフィアナの信条だ。

涙なしには語れない、悲しい結末の物語もある。そういった物語ならではの良さがあることも知っている。しかし、涙よりも笑顔の方が美しいことは語るに及ばず。フィアナはいつまでもハッピーエンドを希求する。

四話　一週間目の出会い

リリルカ・アーデは【ソーマ・ファミリア】に所属する、小人族（パルゥム）の少女である。

職業はサポーター、及び冒険者を対象とした盗人。

荷物を持つ、迷宮内のマッピング、ボウガンなどの遠距離武器による後方支援。【ステイタス】を得ても、冒険者として身を立てていく戦闘能力を持てなかった落伍者がサポーターだ。少なくともリリルカ・アーデにとってはそういう認識であったし、彼女の周りの冒険者も同様だ。

ゆえに、彼女は虐げられ、苦痛の日々を送って来た。齢十三にして、この世に絶望し、冒険者を恨み、主神（ソーマ）にも愛想を尽かしている。

彼女の泥棒としての手口は単純だ。サポーターとして冒険者に同行し、迷宮探索の隙を突いて財布や戦果を奪い、逃走。戦闘には使えないが、独特な魔法を用いれば尻尾も掴ませない。

「……あの方がいいですね」

この日も早朝から中央広場（セントラルパーク）に張り込み、獲物を見定めていたリリルカは、一人の少女をターゲットに決めた。

金髪碧眼の少女。背丈は小さく、小人族の可能性も多分にあった。だが、だから何だと言うのか。同族だから盗みの対象にしない、などという甘さは擦り切れている。むしろ、同じ小人族であるにも係わらず、冒険者をやっていくだけの才能があることに嫉妬が湧き上がるのだ。

装備こそ絵に描いたような初心者のそれだが、パッチリとした眼にも、背中にも自信が漲っている。特筆すべき才能を持たない筈がない。

「お姉さん、お姉さん。金髪のお姉さん」

ターゲットが小人族の初心者冒険者だとすれば、【ステイタス】もたかが知れる。物を盗み逃走するには易い相手であり、万が一捕まったとしても、そう酷いことにはならない。

無論、対象の冒険者としての能力が低ければ、盗みによって得られ

る成果も少ない。だが、一日の食事に困るほど貧しさに喘いでいるわけでもなし。少ないリターンでも生活は続けていける。
「なぁに？　お姉さんなんて初めて呼ばれて嬉しいし、ちょっとしたお願い事くらいは聞いてあげるわ！」
「お姉さんさえ良かったら、サポーターとして雇っていただけませんか？」
「いいわよ！　今日から新しい階層に入るつもりだったから、サポーターがいるのは助かるもの。今夜も美味しいご飯を食べるために荒稼ぎしてやるわ！」
　即断即決。迷う素振りさえ見せない。
　サポーターを見下す冒険者が多いとはいえ、無警戒でいられるかは全く別の話だ。
　迷宮内は、どこでモンスターが誕生してもおかしくない。転じて、迷宮の全ての空間が戦場となり得る。警戒心を強く保たねば生き残れない場所に、会ったばかりのサポーターを連れていくことには躊躇が生じて然るべきだ。
　だからこそ、サポーターには『自分を売り込む能力』が必要となる。売り込むまでもなく了承されたことに、呆気に取られてしまう。
「ほ、本当にいいんですか？　リリはあなたの名前を知りませんし、あなたもリリの名前を知りませんよね？　それなのに？」
「女に二言はない!!」
　長いサポーター人生でも、一度として見たことのないタイプに頭を抱えたくなる。頭に回るべき栄養が全て外見に回ってしまっているのではないか、と疑わざるを得ない。
「先ほど、新階層に行くつもりだと仰ってましたが、何階層か教えてもらってもいいでしょうか？」
「聞いて驚きなさい！　何と――」
　――第二階層。フィアナ・グローリーと名乗った少女が進出する階層だ。
　自信満々であるから、どれほどの数字が飛び出すかと身構えた、リ

リルカが拍子抜けする見事な初心者振り。架空の女神と同名であること以外、フィアナはいたって普通の小人の冒険者だった。一週間前に冒険者登録を終え、道具を揃え、第一階層で迷宮内でのモンスターとの戦闘や探索に体を慣らし、二階層に挑む。一週間という所要時間を含めて、ごく一般的な新人冒険者である。

「やあ！　たあ！　せぇい!!」

戦い方も新人の域を出ない。

モンスターの攻撃を回避する。もしくは左手の盾で受けてから、右手に握った手斧を急所に叩き込む。

それだけだ。《スキル》も《魔法》も一切使われない。

「やった、やったわリリ！　コボルトを二体も一気に倒せた！」

最弱のモンスター二体の同時討伐。人によっては冒険者となった初日に挙げられる勝利である。

けれど、フィアナは腐ることがない。人より成長が遅い、人より弱い、その事実を自覚しているだろうに、己の成果を誇る。彼女は冒険を楽しんでいた。

そんな感情、リリは知らない。ダンジョンを憎むばかりであった彼女にとって、冒険は楽しむものではなかった。

「流石です、フィアナ様！」

荒れる内心とは裏腹に、口は機械的に煽て文句を紡ぐ。

片や穢れを知らぬかのような少女。片や無意識レベルにまで盗みの技が染み付いてしまった落伍者。

同じ小人族なのに、同じ年代なのに、同じ女なのに。どうして、どこでここまで差が付いたのか。『運命』が存在するならば、リリは憎悪を叩きつけたくて仕方なかった。

「んも～、それほどでもある！　でも、リリには助けられてるわ。あなたが周囲を見てくれてるから、前のモンスターだけに集中できるんだもの。ほんと、ありがとうね」

これは毒だ。フィアナは真実一部の闇も抱えていない。彼女が伝える感謝は純度百パーセントであり、誠意のみが宿る。

打算も虚偽も混ざらない。そもそもそういった思考は、彼女の中に

無いのかもしれない。
だから、猜疑心の強いリリには劇薬と化す。フィアナの言葉を疑わないのでも、疑えないのでもない。疑う余地が無いのだ。かつて優しき老夫婦の下に身を寄せた時以上の暖かな感情を向けられると、どうすればよいのか分からなくなってしまう。
「えいっ！」
フードの下に顔を隠すことも、フィアナは許してくれない。リリの両頬を手で挟むや、頬肉を押し上げて、不格好な笑みを作らせる。
「リリは可愛い女の子なんだから、もっと笑わないと駄目よ。世界の損失だわ！」
間近に迫った、幼い美貌に不思議と胸がドキリと高鳴り、リリは逃げるように後退る。自分はノーマルだと言い聞かせ、しかし言い聞かせる事にフィアナのことを意識してしまうというスパイラル。頬が真っ赤に染まるほどに熱の籠った頭では、解決策がちっとも思い浮かばない。
物理的にも精神的にも距離を詰めてくるフィアナ・グローリーは、リリルカ・アーデの天敵に違いない。『敵』だと思い込まなければ、あっという間に絆されてしまいそうだった。

五話　大激闘

ダンジョン・リザードは、第二階層から出現する蜥蜴型――正確にはヤモリ――のモンスターである。

四肢に備わった吸盤を使い、壁や天井を這いずり回り、暗がりからの奇襲を得意とする。第一階層でゴブリンやコボルトを斃し、意気揚々と第二階層に降りた冒険者の多くは、ダンジョン・リザードの不意打ちという洗礼を受ける。

とはいえ、所詮は大きいだけの蜥蜴だ。不意を打たれた程度では、冒険者も斃れはしない。体勢を立て直した新人が逆襲を達成する光景が、第二階層ではありふれていた。

「この、蜥蜴！　いい加減にくたばりなさい!!」

ダンジョン・リザードの突進を、横方向に転身して回避。フィアナは起き上がると同時に一閃を見舞うが、勝利には今一つ届かない。

念入りな予習と、サポーターのリリの手助けもあり、大蜥蜴の奇襲を回避したのは数分前のことだ。先制攻撃を外し、態勢を崩すモンスターの背中に振り下ろされるは手斧の刃。しかし、フィアナの腕力では仕留め切ることが出来なかった。

ダンジョン・リザードはフィアナを捉えることが出来ず。フィアナの攻撃は威力が低すぎて、ダンジョン・リザードに碌なダメージを入れられない。開戦当初から戦況は変わることなく膠着状態に陥っていた。

『ジャアアア!!』

「んんっ――きゃあ!?」

ダンジョン・リザードが身を捻り、轟と風を唸らせながら尾を振るう。棍棒よりも太く、鞭の如くしなる横薙ぎの威力は侮れない。盾を構え、待ち構えていたフィアの体は衝突を堪え切れず、ゴロゴロゴロゴロと後方へと転がっていく。

明確な隙だが、彼女は一人で戦っているのではない。ダンジョン・リザードの前脚を、リリがボウガンで以って射貫く。追撃は防がれ、フィアナは戦線へと復帰する。

「足止め助かったわ！」
「フィアナ様は危なっかし過ぎるんです！」
ボウガンで牽制するリリを追い越し、モンスターへと肉薄。疾走の勢いを手斧に乗せ、フィアナは全霊で振り下ろす。吹き飛ばされた怒りを乗せた刃は、「ズバン！」と音を立てて大蜥蜴の尻尾を斬り落とし、逆襲（ヴェンデッタ）を果たした。
『グ、ギャアアアア!!?』
激痛に絶叫するモンスターとは対照的に、怒りを発散したフィアナは冷静だった。冷静にダンジョン・リザードの討伐方法を編み出した。
円盾を放り捨て、両手で鉄斧を握る。僅かに膝を曲げ、腰を落とし、獲物は体の側面に構える。大きく息を吸い込み、次いで鋭く吐き出すと共に武器を振り抜いた。
「ふっ――やぁああ!!」
その一撃は、太く、たくましい大樹を切り倒すべく、磨き上げられた木こりの技。フィアナが誇る最強の技は、振り下ろしでも振り上げでも、況してや刺突でもなく、横薙ぎに他ならなかった。
英雄に憧れ、英雄としての姿に拘るあまり、自身の特技を忘れるとは不覚。英雄たらんと格好つけることを辞めたことにより、少女は本領を発揮した。手斧の鈍い刃はダンジョン・リザードの左前脚に深々と突き刺さり、機能停止にまで陥らせる。
「一発二発入れても致命傷にならないなら！　ちょこまかと動かれることが鬱陶しいなら！　脚を全部潰してやるわよ!!」
四肢を潰され動けなくなったダンジョン・リザードは、俎板の鯉も同然だ。反撃の憂いを断ってから、死ぬまで斧を振り下ろせばよかったのだ。
思考停止したかのような、野蛮な戦法だ。しかし、賢しらに策を張り巡らせることは、冒険者としての経験が浅いフィアナには荷が重い。単純にして稚拙な戦法であるからこそ、彼女でも十全に推し進めることが可能となるのだ。
「せい、せい、せい、せい、せぇぇぇぇぇいっ!!」

機動力が大幅に低下したダンジョン・リザードへ、フィアナは勇猛果敢に躍りかかる。小さな体格を活かしてチョコマカと動き回り、モンスターを翻弄。死角に潜り込むことに成功すると同時に畳みかける。大蜥蜴の脚に連撃を加え、幾筋もの裂傷を刻んだ。

小技を連発し、敵に隙を作り出すのは、大技を当てるための前準備だと相場は決まっている。

「存分に食らいなさい！　――木こりスマァァアアアッッシュッッ!!!!」

高らかな叫びの下、フィアナの必殺技が炸裂した。

予め集中的に肉を抉っていたこともあり、ダンジョン・リザードの左後ろ脚を派手に切り飛ばす。

これで左側の二足は失われ、文字通りモンスターの機動力は半減した。放置しようと数分後には出血多量により、フィアナの手元に勝利のトロフィは転がり込んでくるが、彼女は良しとしない。

目指すは完勝。姑息な時間稼ぎなどするものか。小狡い真似をしなくばダンジョン・リザードにも勝てない冒険者に明日の栄光は訪れない。

『ギィ、ギィ、グギ』

左側面に立つフィアナへ向き直るべく足を蠢かす大蜥蜴だが、あまりにも遅い。肝心の左側の脚が全滅していることが原因だ。

結果、正対するはずが、少女冒険者に横っ腹を曝け出すだけになってしまっている。

「やっちゃってください、フィアナ様ぁ！」

一度はダンジョン・リザードの四肢を潰すことを考えたフィアナだが、意見を翻す。足を二本失った段階で、かのモンスターの速度の大半は殺され、また体力も著しく消耗している。これ以上、足を潰す必要はない。

無駄に戦闘を引き延ばすことなく、今ここで決着をつける。

同族の激励と、内から湧き上がる決意が、フィアナに力を漲らせた。

「任せなさい、リリ！　あなたの想いは受け取ったわ！」

振り上げ、返す刃で振り下ろす。上下の二連撃が、大蜥蜴の腹部か

ら背部にかけて引き裂く。傷は内臓にまで達したらしく、ダンジョン・リザードが吐血するほどの大ダメージだが、ここで終わらない。
「んんんんん！　これで終わりよ！　木こりスマッシュ!!」
『ギャアアアア、ア……アァ』
横っ腹に刻む一文字。先の縦方向の斬撃と合わさり、大きな十字を描く。
パックリと開いた傷口からは鮮血が噴出し、瞬く間にダンジョン・リザードの体力を奪い去る。長く続いた激闘も、これにて幕引き。フィアナはリリに助けられ、初めて遭遇するモンスターとの戦闘を無事に切り抜けたのであった。
「ブイ！　リリ、私たちの勝ちよ！」
勝利のブイサインと共に咲き誇る、満面の笑顔。土汚れや返り血に塗れて尚、貶められない輝きが、リリの目を細めさせた。
「フィアナ様は、本当に仕方ない人ですね」

六話　換金

「２２００ヴァリス!?　本当に？　嘘じゃないのよね??」

夕刻。ダンジョンから帰還し、魔石やドロップアイテムなどの戦果をギルドの換金所に持ち込んだフィアナは、担当者に詰め寄っていた。

「ああ、勿論だとも。この道十五年の俺が断言する」

２２００ヴァリスという金額が小さく、不満に思っているのではない。逆だ、金額が大きすぎて、査定に間違いが入り込んだのではないかと疑ってしまっていた。

Ｌｖ１の冒険者の五人パーティーの一日の平均収入は２５０００ヴァリスだとされる。

頭数が増えたことによる負担の軽減。戦力増大によって、一度の多数の敵を相手取れる。人数が増えた分、より多くの戦果を地上へと持ち帰ることが可能。

パーティーを組むことによるメリットは数多く存在し、故にパーティーとは能力の足し算ではなく掛け算だと言われる。パーティーの誰かが一人（ソロ）でダンジョンに潜った場合の収入は、五人の収入を等分した５０００ヴァリスには決して届かない。精々３０００から４０００の間に収まるはずだ。

翻り、リリと組む以前のフィアナの一日の収入は、１０００ヴァリス未満だった。ドロップアイテムの出が悪い、遭遇するモンスターが徒党を組んでいるために戦闘を仕掛けられずに回れ右をする、などの悪条件が重なった日には４００ヴァリスを下回る。

冒険者の経験が浅いことを除けば、全ての原因は小人族であることに終始する。

非力であるが故に、一度の戦闘が長引き、体力の消耗も激しい。多く戦えない以上は、当然戦果も少なくなる。

一人（ソロ）で迷宮に潜る場合、戦闘から荷物持ちまで一人で行わなくてはならないが、小人族の体格では多くの荷物を持つことが出来ない。したがって、バックパックにある程度中身が詰まった段階で地上に戻

り、再度ダンジョンに突撃するという手間が一日の間に何度も発生する。
種族に由来するから解決し難い問題は、しかし同じ小人族であるリリルカ・アーデというサポーターを得ることで解決に導かれた。
彼女の支援により、戦闘時間は短縮され、疲労も軽減。頭数が倍に増えたことで持ち運べる荷物の量も増した。特に、リリが持つ【縁下力持（アーテル・アシスト）】というスキルは、装備重量が一定値を超えると【ステイタス】に補正が掛かる。魔石やドロップアイテムの持ち運びに四苦八苦するフィアナには希望の光となった。
故の２２００ヴァリス。過去の最高収入を倍してなお余りある金額を、この日の収入は叩き出したのである。
「よく頑張ったな、嬢ちゃん」
冒険者としてのスタートを切った途端に躓いたフィアナのことを、ギルドの職員たちも心配していた。日に何度も相対する換金所の担当者は殊更その念が大きく、躍進を遂げた少女を褒め称える。
「いいやっっったぁあああああ!!!!!」
その場で小躍りし、リリに抱き着く。しつこいほどに頬擦りしていると、「キマシタワー」とどこからか囃し立てる声も聞こえるが、『仲間と成果を上げた喜び』の前には気にならない。
「フィ、フィアナ様！　ちょっと離れてください、よ!!」
「んもー、恥ずかしがっちゃってぇ。ちゅ、ちゅ、ちゅ～～～」
「うぎゃあああ!?」
頬に、鼻に、額に、顎に、顔中に唇を落とすフィアナ。標的となったリリも激しく抵抗するが、悲しいほどに冒険者とサポーターの【ステイタス】差が現れ、逃れられない。
フィアナのテンションは天井知らずに上昇し、収まる勢いを見せなかった喧騒も、第三者の介入があれば鎮火する。早い話、二人は騒ぎ過ぎたのだ。換金所の前でワチャワチャと騒ぐ行為は、他の利用客の邪魔にしかならないため、ギルドの職員によって建物内から摘まみ出された。
２２００ヴァリスの収入は、フィアナに絶大な達成感を与え、また

愛すべき主神にも胸を張って報告できる。そのため、まるで親猫が子猫を運ぶが如く、襟首を掴まれて屋外に放り出されようと、ニコニコと頬を緩ませていた。
「それで、フィアナ様。報酬の件についてですが……」
「半分こでいいわよね？　ちょうど二等分できるし」
「は⁉　サポーターなんかに半分も渡したらいけませんよ、フィアナ様！　いいですか？　サポーターは冒険者様のおこぼれに与(あずか)っているだけの存在なんです。冒険者様と同額の報酬なんて受け取れません」
　つまるところ、冒険者とサポーターではパーティー内の貢献度の大きな差があるのだ、とリリは言う。
　片や命を張ってモンスターと戦い、片や戦う力を持たない荷物持ち。成程、負担も危険も貢献度も段違いだろう。
　リリの言っていることは正論なのかもしれない。冒険者やサポーターの間では、オラリオでは当然の共通認識かもしれない。
　それでも、フィアナは言われるがままに頷けなかった。オラリオに来たばかりだから、冒険者になったばかりだから、常識が足りないのだと言われてしまえばそれまでだ。だが、リリにはリリの言い分があるように、彼女にも彼女なりの言い分があるのだ。
「私って一日で１０００も稼げないのよ。だったら、この２２００までの増加分はリリのおかげってことじゃないの」
　リリのサポートがあったから２０００の大台に乗せることが出来た。彼女がいなければ、いつも通り１０００にも届かなかったはずだ。
　その事実から目を逸らし、リリに小金を渡し、自分だけは大金をがめつく確保するなど恥知らずな真似は出来ない。小さな体にも一端の自尊心(プライド)が宿っているのだ。
「でも、そんなことしたら『サポーター如きが生意気な』ってリリが他の冒険者様たちに疎まれてしまいますよ」
「じゃあリリは、私が仲間から金を巻き上げる、ド腐れ腹黒美幼女だって噂を立てられてもいいの？」

己にデメリットが生じるから、という論理で意見を押し通さんとするリリに対し、全く同じ理論武装を施してフィアナは立ち向かう。
実際問題、彼女は、『冒険者とサポーターの関係』はリリが言うところが全てではないと感じている。
弱者から搾取する者は、強者ではない。貧しい、力が足りない、名声が欲しい、『何か』に飢えているから、より下の弱者から簒奪しているだけの卑劣漢に過ぎない。
対して真の強者は弱者から奪い取らない。奪い取るまでもなく、自力で目的物を手に入れることが出来、また潤っているからだ。
卑怯者か勇者か。英雄となることを志す、フィアナがどちらを望むかは語るまでもない。
「サポーターから金を巻き上げたりなんかしたら、今いる英雄たちに絶対白い目で見られるわ」
とはいえ、リリも生活が懸かっている以上は、引くに引けまい。互いに主張をぶつけるだけではなく、妥協点を探ることは必須である。
「ねえ、リリ。私と契約しましょ？　これから先、私とパーティーを組んでダンジョンに潜るの。それなら他の冒険者が相手してくれなくなったって食い扶持には困らないでしょ？」

七話　一ヶ月の絆

フィアナが半ば強引にリリと協力関係を取り付けてから早一ヶ月。二人の精神的距離は着実に縮まっていた。

「フィアナ様！　次は右です！」

「オッケー、リリ！　一当てするから、援護よろしくぅ!!」

小人族、女、子供、非才の身、などの共通点が多いことが幸いしたのだろう、フィアナ／リリが求めるものをリリ／フィアナは即座に理解できる。まるで血を分けた姉妹であるかのように抜群となった連携は、戦力を二倍にも三倍にも引き上げていた。

右側の通路から飛び出すダンジョン・リザードに対し、フィアナは矮躯を更に縮めることで噛み付きを逃れ、懐に潜り込む。すれ違いざまに一閃。首筋から血を噴き出すモンスターに、リリの追撃の短矢（ボルト）が突き刺さる。

手斧を振り抜いた勢いを利用し、クルリと反転。今度は大きく振りかぶった獲物を、ダンジョン・リザードの首の裏側（うなじ）へと落とす。前後からの裂傷が合体し、太い首が転げ落ちた。

以前は五分以上も掛けて倒したモンスターを、フィアナの無様なへっぴり腰が改善された今では楽々処理できる。

成長著しい小人族のコンビは、第三階層にまで歩を進めていた。

第三階層は、出現するモンスターや階層の構造、明るさなどがほとんど第二階層と変わらない。慢心するわけではないが、第二階層で培ったノウハウをそのまま活かせる階層であるから、一行（パーティー）は気楽に攻略を進めている真っ最中だ。

「んふふふ」

ダンジョン・リザードの死体から魔石を取り出す、リリの手際は滑らかだ。

どこに骨があるのか、どこに魔石があるのかといった体内構造は元より、効率的に作業を進めるために恐らくは刃を入れる角度も調節している。

知識と経験。その双方が伴っていなければ叶わない早業だ。もし

もフィアナがリリと同等の技量を望むならば、少なく見積もっても一年以上はサポーター業に専念せねばなるまい。
　加えて、リリは何もモンスターの解体作業のみを得意するわけではない。後方からの援護射撃や探索のペース配分、ダンジョン内に持ち込む物資の選定など、多岐に渡るサポーターの仕事全ての練度が高い。
　リリ以外のサポーターと組んだ経験はないが、それでも彼女が優れたサポーターであることは明々白々。サポーターの界隈に詳しくないフィアナが、初っ端から大当たりを引けたことは紛れもない幸運である。そのことを噛み締めれば、笑い声の一つや二つは漏れてしまう。
「フィアナ様、急に不気味な声を出してどうかしたんですか。それとも、頭がどうにかなりましたか？」
「ううん。リリと会えてよかったなーって思っただけよ！」
　抱き着き、わしゃわしゃと頭を撫でまわす。出会った当初よりも抵抗が弱まっているのは、単純にリリが抵抗を無駄だと悟ったためか、それとも表面上は嫌がりつつも心の中では受け入れているのか。その答えはリリのみぞ知る。
「もう！　とにかく離れてください！　回収した魔石をバックパックに詰められないではないですか!?」
「むむむむ、それは由々しき事態ね」
「そうです。だから離れてください」
「じゃあ、回収が終わってから、またナデナデしてあげる！」
「どうしてそうなるんですかっ」
　日課の掛け合いもほどほどに。魔石を取り出されて灰化したモンスターを置き去りに、二人は次なる標的を求めて迷宮を探索していく。
　ダンジョンに記された書物を読み耽り、ギルドの講習を受けても、思わぬ障害は転がっている。例えば、地面の凹凸だ。ヒューマンや獣人ならば何でもないような凹凸も、小人族の短足には障害となり得る。

絶対的に冒険者人口の少ない小人族のためだけに注意喚起する文言は、書物にもギルドの講習マニュアルにも載っていない。現地に赴き、体験して初めて認識できる。

サポーター歴の長いリリをして、小人族の幼女とコンビを組んで探索することは初。フィアナにとっては、迷宮の全てが初体験。故に二人の冒険は未知との遭遇の連続であり、連携が滑らかになろうと、決して慢心が産まれることはない。

「リリ、あれ」

T字路に差し掛かったフィアナは、一旦立ち止まる。壁に張り付きながらそっと曲がった先を覗き込むと、モンスターの影が複数屯していた。

安易に通路に出ていれば、その直後に会敵していただろうことは必至の距離だ。数的に不利であることからも、突発的な会戦となっていたら、フィアナも危なかったかもしれない。小人族（じゃくしゃ）として生きる中で育まれた、慎重さに危機を救われた。

リリを手招きすれば、フィアナの下からひょっこりと顔を出しながら敵戦力を冷静に分析する。

「ゴブリンですか。数は三体……武器はないみたいですね」

「あれくらいなら私一人でも何とかなるから、リリは一歩下がって周りを見ててもらえる？　後ろの通路でモンスターが生れ落ちて、挟撃されでもしたらマズいし」

「了解です。危なくなったら援護射撃を飛ばしますから、無茶だけはしないでください」

打ち合わせを終えたフィアナは、瞑目して集中力を高める。敵に察知されることなく、敵影を発見できたことで、彼女には奇襲という手札が与えられている。あとは、それを活かしきれるかどうかだ。

ゴブリンたちの配置と体の向き。フィアナが通路に飛び出してからの、即ちゴブリンたちに気付かれてからの距離と、間合いを詰めるまでの時間。道幅と地面の凹凸具合。障害物の有無。奇襲のアドバンテージにより一体は確実に即殺できるが、それを為したときの残り二体の反応。

あらゆる要素を考慮し、無数の戦況をシミュレーションしていく。効率が悪い物、無駄が多い物、不確定要素が大きい物は軒並み排除。消去法で残った一つを洗練し、最適の段取りを組み上げる。

「――よし」

呼吸を整え、武器の握りを確かめる。

通路に飛び出すと、フィアナは最も手近な個体へと狙い定め、襲い掛かった。急襲にゴブリンたちも反応するが、遅きに失した。カーブによる減速も含め、最短最速の道順を選び取った、フィアナの先手は揺るがない。

威嚇の咆哮を上げんと、口を開けたばかりの小鬼の頭を手斧がカチ割る。

「まずは一匹！」

斧を引き抜く角度を調節し、ゴブリンの亡骸が自らの方へと倒れ込むことを防ぎつつ、フィアナは残りの二体を視界に収める。

構えてはいるが、それだけだ。この時点で反撃に移れていないのだから、対応が遅れている。

モンスターの不利は、冒険者の有利。したがって、フィアナが黙って見ているだけではいない。

一匹目の死体を踏みつけないように、横にずれながら二匹目へと肉薄。ちょうど、三匹目の個体とフィアナとで二匹目を挟む位置関係だ。三匹目に対する肉壁を得て、一度に二匹を相手取ることを回避。さりとて、三匹目の個体が回り込めば、二匹目は壁としての機能を失うので、一息吐く間もなく手早く戦況を動かす。

爪撃を盾で受け止めてから、カウンターの一閃で腕を刈る。悲鳴を上げるゴブリンを、円盾で殴りつけて横に飛ばすことで三匹目と正対。まったくの同時に、互いが互いの命を奪うべく、ゴブリンは腕を、フィアナは斧を振りかぶる。

刹那の勝敗を、射程（リーチ）の差が分ける。

ゴブリンも小人族も、ヒューマンの子供と同程度の体格しか持たない。しかし、体格が同じであろうと、無手の小鬼に対してフィアナは武器を握る。獲物分のリーチの優位のままに、フィアナが勝利し、ゴ

ブリンは血の海に沈んだ。
「これで、ラストね」
そして、隻腕となったゴブリンへと向き直る。
フィアナが一歩足を踏み出せば、その分だけモンスターが後退る。
フィアナは小細工は無用だとばかりに、真正面から斬りかかった。
ゴブリンも応戦するが、既にして腕を失い、一度は気押されてしまった。趨勢は決している。
ゆえに劇的な逆転が起きることもない。危なげなくモンスターを切り伏せたフィアナは、手斧を軽く左右へ振るい、鮮血を落とす。
「はいはい。格好つけてないで次いきますよー」
「ちょ、リリ!? それは言わない約束でしょーが!!」

八話　パーティと【ファミリア】

　フィアナの一日における、魔石の取得の最大数は日々更新される。この日も例に漏れず最高記録をマークしそうなため、朝から夕方までダンジョン内を駆け回ったにも係わらず、彼女はホクホク顔だ。
　ともすれば、一万の大台を超えるほどの戦果やもしれない。捕らぬ狸の皮算用をしながらギルドに入ったフィアナを、換金所から轟く、男たちの怒声が出迎えた。
「はあ!?　１００００ヴァリス!?　これだけの魔石とドロップアイテムだぞ!?　そんなわけあるかよ！」
「あぁ？　じゃあ、何か。俺が査定を間違えたとでも言いてえのか!?」
　一方は見るからに荒くれ者といった風体の冒険者。装備品は傷と汚れが目立ち、手入れがまるで行き届いていない。レベルは恐らく１。フィアナの目には、荒っぽそうには見えても、『強そう』にはこれっぽちも見えていなかった。
　そんな柄の悪いだけの巨漢と相対するは、小さいフィアナの世話を何かと焼いてくれる、禿頭の眩しいギルド職員だ。幼子が見れば泣き出しそうなほどの強面だが、実は子供好きであり、子供を泣かせてしまう自分の顔に複雑な思いを抱えいたりもする。冒険者への応対にて鍛え上げられた度胸は並ではないが、根は善良なのだ。
　飛び交う言葉から察するに、口論の原因は査定の金額にあるらしい。『ギルドの豚』ならば兎も角、真っ当なギルド職員が暴利を貪る真似はしないのだが、冒険者は一歩も下がらず、激論は平行線だ。
　いつ終わるとも知れないので、フィアナは馴染みの担当官のカウンターに並ぶことを諦め、その隣へと本日の戦果を持ち運ぶ。第一級冒険者パーティならば持ち帰る戦果も膨大となり査定には多大な時間を要するが、フィアナは駆け出しだ。彼女にとっては『豊富な戦果』も、その道十数年のギルド職員からすれば全然少ない。数分と待つことなく換金は済ませられた。
「３５００ヴァリスぅ！　三日前の記録には届かなかったけど上々ね！」

リリと分け合えば、一人頭２０００ヴァリス近い。レベル１冒険者の平均収入には届かぬまでも、その日の食事と宿代、そして明日の冒険の資金程度にはなる。収入が少ない余り、故郷から持ってきた貯金を切り崩し続ける生活と、フィアナはおさらばしたのだ。

勿論、支出と収入がほぼ釣り合っている現状は、まだまだ生活に余裕があるとは言い難い。しかし、毎日ダンジョンアタックを繰り返し着実にフィアナの【ステイタス】は伸びているし、探索の効率も高まっている。

つまり、成長期だ。成長するほどに探索の質は高まり、収入と支出の差額もいずれは大きくなっていくはずだ。

「リーリ、リーリ、リーリー！　今日も大漁よー！」

「二人で潜った割には少ないですけどね」

厳しく返しているが、リリの頬も緩んでいた。一日の奮闘が報われる、換金の瞬間は達成感が清涼のように吹き込むのだ。

幼女たちの戯れは、ここ一ヶ月で夕方のギルド恒例となっている。そのことを知らぬは当人たちのみであり、ギルド職員の密かな癒しであった。

「あ？　アーデじゃねえか」

しかし、見る者の心をホッコリさせる光景をぶち壊す無頼漢が一人いた。ギルドの禿頭職員と揉めていた、不潔感漂う冒険者だ。

ヒューマンの男は、身長差から小人族の少女コンビを見下ろし、リリに視線を合わせると唇を吊り上げた。『笑顔』というには些か悪意に染まった醜悪なそれに、リリがブルリと体を震わせ、更に男は嗤った。

まるで良いことを思いついたとでも言いたげに。何でもないことかのように男は言う。

「なあ、アーデ。お前、その金を俺に寄越せよ。

サポーターなんぞにゃあ勿体ねえから、俺が有意義に使ってやる」

『いいですか？　サポーターは冒険者様のおこぼれに与(あずか)っているだけの存在なんです。冒険者様と同額の報酬なんて受け取れません』

『でも、そんなことしたら『サポーター如きが生意気な』ってリリが他

の冒険者様たちに疎まれてしまいますよ』
出会ったその日のリリの主張を、男の高慢な態度からフィアナは想起する。
冒険者が上、サポーターが下。リリと知己であることからも、彼女に下らない価値観を植え付けた者の一人が目の前の男であることは想像に難くない。
男は断られるとは微塵も思っていないかのようにニヤニヤと粘着質な笑みを浮かべ、対するリリは小さな体を更に小さく縮ませた。慣れた口調からは、男が同じよな文句を用いてリリから金を巻き上げたことがありありと伝わる。
本当に下らない。舌を一つ打つと、フィアナは踏み出し、リリを背中に庇った。
「お生憎様、それは出来ないわ」
「あ？　何言ってやがる。禄に冒険できねえ小人族のクソガキは引っ込んでろ」
「彼女とパーティを組んでるのは私だし、パーティリーダーも私なの。換金総額の半分をサポーター（リリ）に渡すことが、これからのパーティでの探索に必要だと思ったからやったわ。
それを横から取り上げられると困るのよ」
武器の手入れや食料の調達など、冒険者は日々の活動に資金を投じる。冒険者と共にダンジョンに潜る、サポーターにも同様のことが言える。先立つものが無ければ何もできないのは世の常だ。サポーターが資金不足に陥れば、その分だけパーティーを組んだ冒険者の活動にも支障が出る。
「はっ、小人族の雌餓鬼が一丁前に冒険者気取りか？　下らねえなぁおい」
「はっ、犯罪者一歩手前の雑魚が一丁前に冒険者気取り？　下らないわねぇ」
小人族というだけで、故郷では同年代からも大人からも馬鹿にされた、フィアナの口論の強さは伊達ではない。
打てば響くように罵倒を返すと、男の額にはビキリと青筋が浮かん

だ。
「俺はそこのアーデと同じ【ソーマ・ファミリア】の団員だ！　他所の【ファミリア】の事情に首を突っ込むんじゃねえ!!」
「そ、だからなに？　【ファミリア】の事情に口を出すなって言うなら、あんたの方こそ私のパーティの事情に口を出さないでくれる？　口臭がキツイのよ」
「――殺す」
　言うや男は、腰に差した剣の柄を掴んだ。恐喝した段階から既に怪しかったが、ギルドで戦闘を始めるとは、いよいよ彼の頭は常軌を逸している。
　だから、状況判断を見誤る。憤怒のままに、生意気な小人の頭を割らんとした彼は、剣を振り上げてしまった。刃がフィアナの命を奪うまでに、鞘から剣を抜き放ってから、振り上げ、振り下ろすという三動作も要する。零距離では鈍間と言っていい。おまけに、不穏な気配がだいぶ前から漂っていたために、フィアナも気合を入れており、まるで隙を突けていない。
「ほぎゅ……!?」
　故に、先手を取ったはずの男は、後手に追い付かれ、追い越される。剣を振り下ろすよりも先に、無造作に突き上げられた少女の拳が、男の股間に埋まっていた。見事なクリティカルヒットは【ステイタス】の差を覆し、一発ケーオーを達成する。
　ギルド内は人が多く、また人目を集め過ぎた。内緒話には適さない。白目を剥きながら泡を噴く男の股間を念入りに五回ほど蹴り上げてから、フィアナはリリを屋外へと連れだした。
「【ソーマ・ファミリア】。主神（ソーマ）ではなく、神酒（ソーマ）を崇める異様な【ファミリア】。団長のザニス何ちゃらは、神酒を利用した独裁体制を築き、【ファミリア】の団員から日夜金を巻き上げている」
「どうして、それを」
　リリがひた隠しにしていた【ファミリア】の実態を、フィアナはつらつらと明かす。
　秘密がとっくに暴かれていたことに、暴いておきながら厄の種にし

かならないサポーターを手元に置いていたことに、リリは呆然とした声を漏らす。
「私がリリと初めて冒険した日。換金した時に抱き着いたでしょ？　あの時が一つの切っ掛けね。小人族の女の子って言っても、小さすぎるし、細すぎるのよ、あなたの体格は」
小さく細い体格。それだけならば、追及するべきことではない。
発育の遅れ、傷病による肉体の衰え、生来的に大きな体格へ成長する素地がなかったということも考えられる。だから、リリの体型に小さな疑問を抱きつつも、その場で問い質すことをしなかった。
「私はあなたの友達で、パーティのリーダーよ？　一緒に行動していれば、あなたが後ろ暗い何かを抱えてることには気付くし、何気ない会話に出てくる特定の単語――『冒険者』や『ファミリア』に反応されれば、ねえ？」
サポーターの身分を卑下する価値観。所属する【ファミリア】への非友好的な態度。年齢にそぐわない体格。
一つ一つは「そういうこともあるだろう」と見過ごしてしまいそうになるほどに小さいが、ヒントは幾つも転がっていた。フィアナは、それら点と点を結び絵図を描いただけだ。
「大体の事情は推測できるし、私たちが出会ってから一ヶ月も経つ。それだけの時間があれば、推測の裏付けだって取れるわよ」
「じゃあリリの事全部分かってて、知らないフリを続けていたんですか？」
「まーそうなるわね。小さな泥棒さん」
リリの事情の裏付け調査を行う過程で上がった『冒険者を標的とする小人族の泥棒』の正体が、リリルカ・アーデその人であることも突き止めている。屈強な冒険者を相手に、自他ともに認める貧弱な【ステイタス】のリリが逃げ果せた理由もまた【ステイタス】にあるのだろう。【魔法】か【スキル】か、特異な能力を持っていれば金銭や魔石を盗み取ることも難しくない。
「リリが泥棒であることまで分かってたのに、どうしてコンビを解消しなかったんですか？」

盗人として近づいた罪悪感、一か月もの間本心を隠していた後ろめたさからか、リリは悄然とする。
それでも逃げ出さず、フィアナの真意を問う姿は、断罪を待ち望む囚人のようでもあった。
「二つ目がリスクが小さかったことね。故郷から持ってきた貯金はレイア様に預けているから、リリには手出しできない。魔石やドロップアイテムの換金額はお察しだから、もし盗られても大きな痛手にはならない」
これはコンビを解消しなかった理由。
続けて、コンビを続けた理由を告げる。
「何より、私はリリの友達だもの。友達が困っていたら助けてあげたいって思うのが普通じゃない？」
【ソーマ・ファミリア】の実態を掴み、リリの苦しみを知って尚、振る舞いを変えなかったのも彼女を救うためだ。
盗人としての自覚のある少女に「あなたは盗人だ」と名探偵の如く指をさせば逃げられるに決まっている。故にまずは、リリが事情を話せる程度にまで信頼を築く心算であった。
彼女の口から自発的に告白を引き出せれば最良。フィアナが追求しても、逃走されない信頼を獲得できていればベターといったところだ。
そんな計算もつい先ほど崩されたから、フィアナは計画を前倒しにしている。
「そんなの……嘘に決まっています。
冒険者がリリのようなサポーターを助けてくれるはずがありません！」

九話　そして二人は本気で向き合う

絶叫のような、それでいて悲鳴にも似た否定を聞いたフィアナは納得の念しか抱かなかった。

【ソーマ・ファミリア】の闇は深く、リリは何年も前から引き摺り込まれてしまっている。その苦しみを知らぬ部外者が差し伸べた手を掴めないほどに追い込まれている。

オラリオに来てから初めて得た、友達の苦しみが軽くないと知ればこそ、彼女を助けたい気持ちが膨れ上がる。

「冒険者がサポーターを助けるんじゃない。さっきも言ったでしょ、友達だから助けたいの。

あなたがサポーターでなかったとしても、私はやっぱり助けたいと思うはずだわ」

「……意味が分かりません。

だって、だって、リリはフィアナ様を騙して盗むために近づいたんですよ!?　嘘から始まっただけの関係。嘘の上に成り立つ関係。そんなものに価値なんてないじゃないですか。

【ソーマ・ファミリア】と神酒の危険性が分かってないはずがないでしょう。無価値な塵のために、地獄に突っ込む人がどこにいるんですか!?」

「無価値なんかじゃない！」

盗みの標的に選ばれたことさえ気にしなかったフィアナが、「それだけは許さない」と烈火のごとく怒る。

小さな体と高い声。侮られて当然の要素を覆す、覇気の籠る声が天下に轟く。

ただ気迫だけで野次馬の心をビリビリと打ち据え黙らせる。唾を飲み込む音さえ聞こえそうな沈黙が訪れた。

「始まりが嘘でも、その先にあるものまで嘘だとは限らないでしょ。

この一ヶ月、私を嵌めるタイミングはいくらでもあった。けど、リリはいつだって私を支えてくれた！　その全てが嘘だったなんて言わせない！」

初めての共闘が勝利に終わった時。ギルドの換金所で、収入の最高額を記録したとき。協力して強敵を打倒した時。呆れたようなツッコミを入れられたときでさえ――すべてが黄金色に輝く日々であった。

彼女と交わした言葉、笑顔、勝利を祝するハイタッチ。そこには真実も混ざっていたはずだ。

「リリ、あなたはどうしたい？　どうしてほしい？

私は絶対に裏切らないから、力になるから、本当の気持ちを聞かせて」

「以前、一度だけ【ファミリア】から逃げ出したことがあります。

行く宛もなかったリリを、花屋を営む老夫婦が受け入れてくれました。実の親には親らしいことを一度もしてもらえませんでしたけど、きっとこういうのんが親子なんだなって、家族なんだなって思える幸せな時間を過ごせました。

まあ、全部っ冒険者にぶっ壊されましたけどね！　リリを追いかけてきた【ソーマ・ファミリア】の団員たちが嗤いながら店を踏み荒らし、おじいさんとおばあさんは私を追い出しましたよ」

幸福の形を知ってしまったからこそ、そこから転落する苦しみを教え込まれた。

大恩ある、大好きな老夫婦を結果的に傷つけてしまったこと、二人に怒りの眼差しで射抜かれたことはトラウマになっていても不思議はない。

「助けて？　守って？　救って欲しい??　そんなこと気軽に言えるわけないです！

ギルドも、冒険者も、親も、神様も……誰も守ってくれなかったから！　誰も救ってくれなかったから！　こうなっているんじゃないですか!!」

リリの過去は聞くだけでも胸を痛めるほどに悲しく。しかも話に出てくる悲劇は全体のほんの一部だ。

あまりにも救いがない。だから救いたいとフィアナは願う。

どこの誰がリリを見捨てようと、盗人として糾弾しようと、フィア

ナ・グローリーだけは彼女の隣から離れない。
「これまでは誰も救ってくれなかった、救うことに失敗してきた。そういうことなんでしょうね。
でも、私はまだそのどっちにもなってない！　ギルドに、冒険者に、大人に失望するのはあなたの勝手だけど、私にまで失望（それ）を押し付けるな！
殻に閉じこもってないで、前を見ろリリルカ・アーデぇぇぇぇ!!!
ここに立っているのは、あなたを見捨てた連中じゃない！」
フィアナ・グローリーは、同族が失ってしまった『勇気』を胸に宿す勇士が一人。
【ソーマ・ファミリア】が何するものぞ。神酒が何するものぞ。立ち塞がるならば、立ち向かい、乗り越えるだけのことだ。
助けるべき、助けねばならぬ少女がいる限り、フィアナは逃げ出さない。体が弱くとも――否、体が弱いからこそ、心だけは誰にも負けないように強くあらんとする。
目は口ほどに物を言う。ただでさえ雄弁な口を持つフィアナの目が、彼女の決意と覚悟の程を叫んで止まない。
今まさにリリを説得しているように。誰に咎められようと、忠告されようと、拒絶されようと、手を伸ばし続ける。
「だったら！　そんな妄想染みたことを言うんだったら！　証明してみせてくださいよ!!
フィアナ様が他の冒険者とは違うことを信じさせてくださいよ！
あれだけの大口を叩いたんだから出来るんでしょう!?」
出来るわけがない。逃げ出すに決まっている。
絶叫は寒々しく。その裏に隠された本音こそを浮かび上がらせた。
未だ、言葉にはならずとも、漸く隠されてばかりいた本音が、輪郭だけとはいえ見えるようになったのだ。そこから目を逸らすことなどあってはならないし、フィアナにはそのつもりもない。
「だったらやってみせてやるわよ！　主神（ソーマ）のケツを蹴り上げてでも、あんたを【ファミリア】から逃がしてあげる」
「どうやってソーマ様に会うって言うんですか!?　絶対に団長が邪魔

しますし、仮に会えたとしてもあの方は酒造にか興味がない。眷属がどうなろうと気にしない神なんですよ!? ……【ファミリア】からの脱退なんて聞き入れてもらえませんよ」
「だーっ！ さっきから出来ない理由ばっか上げてうるさい！ 私が！ この街に来てから初めて出来た友達を救うための作戦を用意していないと思う!?
女の子はねぇ、灰を被ろうが何だろうが、全員がお姫様なのよ！ 黙って英雄(私)に救われなさい!!」
そして、フィアナはリリを肩に担ぎ上げた。じたばたと暴れる小人の少女を抑え、とある宿屋へ足先を向ける。
抵抗をしたければ抵抗すればいい。拒絶したければ、拒絶するがいい。リリの勝手を認める代わりに、フィアナも勝手に相棒を助ける。
「大丈夫。もううちの主神のレイア様には話を通してあるし、計画もかなりの高確率で成功するだろうって太鼓判も貰ってる」
道行く通行人に聞かれないよう、押し殺した声でフィアナは告げる。
凄まじい手の早さだが、それもそのはず。【レイア・ファミリア】の団員は現状フィアナの一人だけであり、対する【ソーマ・ファミリア】は中堅に相応しい規模・勢力を誇る。力関係を引っ繰り返すには、迅速に動く必要があった。
そこで、最大の助けとなったのが女神レイアである。
彼女が下界に降臨してからフィアナと出会うまでの期間に行った情報収集。その下地があったから、フィアナもリリを救う手立てを短期間のうちに構築できたのである。
レイアは天界に居た頃から、子供を守るために尽力した、生粋の母神だ。全知零能の身となっても、その性質は変わらない。子供(フィアナ)の友達までもが庇護の対象となる。
慈悲深き母の愛は、さながら曙光の如く。眩き加護に後押しされるフィアナが、酒に溺れた末の闇になど負けるはずもない。

十話　殴り込み

女神の泊まる宿に到着した少女二人を、レイアは優しく出迎えた。
リリが背負う重荷を全て理解した上で、それでもなお受け入れると、母性溢れる笑みを浮かべたレイアの優しさに、灰被りの姫は大号泣。隣のフィアナは「あれー？　私のときは言葉を尽くしまくっても上手くいかなかったんだけどなー」と神と幼女の力の差に打ちひしがれた。
ともあれ、リリの固く高い心の壁をレイアが崩したことにより、三位一体の共同戦線が結ばれ、三人は宿屋を出た。
向かう先は【ソーマ・ファミリア】の本拠（ホーム）、ではない。本丸に攻め込む前に、保険を掛ける意味で、一つ寄るべき場所があった。
「ミーアー！　ミアはいるー？」
「んなでかい声で呼ばなくたって聞こえてるよ」
のっしのっしと店奥から現れる女主人は、低身長が基本のドワーフとは思えぬ長身と、ドワーフらしい恰幅の良さを併せ持つ。酔っ払い店で暴れる冒険者を片腕で放り投げる女傑は、平時であろうと迫力がある。彼女の女子力（物理）の前では、小人族の少女など子犬以下だ。純粋な握力だけでも、頭を粉砕されて余りある。
「ただ飯を食いに来たってわけじゃなさそうだが、どうかしたかい」
「うーんとねぇ……二時間後くらいに祝勝会しに来るつもりなんだけど、もし予定が変わって私たちが来店しなかったら、これをリューに渡してもらえる？」
両腕を組みながら睥睨する女主人の瞳を、フィアナは正面から見返し手紙を収めた封筒を差し出した。
零細ファミリアに過ぎた高級封筒は、明かりに照らした程度では中身を透かせない。外側に金を掛けるということは、中身の重要性にも転ずる。胡乱げなミアの視線を受け、フィアナは事情を少しだけ明かすこととした。全てを秘匿することも可能だが、それを実行すれば不和の原因にもなり得るからだ。
「リューが喜ぶプレゼントについて書いてあるだけよ。あの人に危険

が迫ることはないわ、絶対にね」
強い念押しは『これ以上踏み込んでくれるな』という忠告だ。
また、言葉を選んでいるということは、選ばれた少ない言葉に嘘はないということでもある。ミアが懸念する、『従業員が危ない橋を渡らされる可能性』はただの杞憂であると言外に示してみせた。
必要最低限の情報開示だが、しかし相手は歴戦の女主人だ。不用意に踏み込むことはせず、引き際を弁えていた。鼻を一つ鳴らすに留め、まるで引ったくるようにして手紙を受け取ると、店奥の厨房へと戻っていく。
ミノタウロスの如き、肩幅の広い背中に感謝の一念を捧げると、フィアナも踵を返した。店外で待機していたレイアとリリの二名と合流し、首尾が良好であることを伝えれば、いよいよ事態はクライマックスへと向かいだす。
【ソーマ・ファミリア】の本拠（ホーム）へと、三人は歩を進めた。ギルドにてかのファミリアの団員に手を上げてしまったことから、時間を置けば報復されるかもしれない。それを防ぐための電撃作戦の決行だ。
先陣を切る者はフィアナ・グローリー。いつにも増して気合の入った少女が、オラリオのメインストリートを颯爽と征（い）く。
二番手は、【レイア・ファミリア】主神の女神レイア。彼女はたった一人の眷属とその友人を助けるべく、いっそ大人げないほどに事態に介入する決意を固めていた。それゆえの中衛。前衛（フィアナ）を支え、かつ後衛（リリ）を庇えるポジショニングだ。
そして最後尾。ある意味、本件における主役とも言えるリリルカ・アーデが一行（パーティ）の末に居た。不安と恐怖から足が重くなりがちな少女を、女神とその眷属が激励する。
「ここが【ソーマ・ファミリア】の本拠（ホーム）か。意外と小さいのね」
【ソーマ・ファミリア】は狂人の巣窟だが、豊富な団員数と『ランクアップ』を果たした者が複数名在籍することから中堅の【ファミリア】に位置づけられる。
しかし、団長が【ファミリア】の運営資金を横領しているためか、あるいは主神が酒造りに資金を投じすぎているせいか、中堅にしては資

金に余裕がないらしい。彼らの本拠（ホーム）は同じ規模の【ファミリア】と比較すると、ずっと小さく、また年季が入っているようだった。

見張りの一人も立っていない門扉を潜り、建物内に堂々と無断で侵入するフィアナ。さも当然のような顔をしてレイアがその後を追い、リリも「どうにでもなれ！」の精神で続く。

「うわ、きっつ」

建物の内部には、咽返（むせかえ）るような酒気が充満していた。壁の向こうからは酔っ払いたちの下卑た笑いや呂律の回らない会話だけが響く。

真面な場所ではないし、真面な者が一人としていない。擁護できる点が、真実一つもない。

フィアナの短い悪罵には、他二名も共感しているのだろう。否定の声はおろか気配すら立ち昇らない。

侵入してから汚点のみが転がっている【ソーマ・ファミリア】。酒と堕落と背徳の園は常人が忌避して然るべき場所だ。

しかし、内心はどうであれリリは【ソーマ・ファミリア】の一員だ。そのため本拠（ホーム）の構造も熟知しており、彼女の案内の下に一行は一直線に主神ソーマの自室へと近づいていく。

途中、闖入者の存在に気付き誰何してくる団員もいたが、残らず女神の微笑みに鼻の下を伸ばして道を空けた。所詮は飲んだくれ、警戒心や思考能力は微塵もない。『美女のおねだりを叶える良い男』を演じることに否やはないらしい。リリの同派閥団員を見る目の温度が非常に下がった一幕である。

「あんたがここの主神のソーマ？」

バーン！　と無駄に音を立てて扉を開け放ち、フィアナは室内にいた神物（じんぶつ）へと問いを投げる。垂れ流される気配から神の一員であることは間違いないが、それでも人違いならぬ神違いの可能性もないわけではない。確認は重要だ。神違いのまま問答を進めれば、間抜けどころの話ではない。

なお、該当人物が何らかの作業――リリから聞く分には十中八九酒造に関する何か――を行っていようと知ったことではない。ソーマという神は、眷属など知ったことではないとばかりに酒造にのめり込

んでいるというのだからお相子だ。
「もーしもーしっ!! 耳と頭が悪くないんだったらぁ! 返事の一つくらいしてくれませんかねぇ!!!?」
数秒その場で待機すれども、返事がない。むかっ腹の立ったフィアナは、ズンズンと部屋に侵入し、ソーマらしき男神の耳元で声を張り上げた。
大音量で放たれた、幼児特有の甲高い声はモンスターの咆哮(ハウル)にも似る。発達した声帯の能力も凄まじいが、それ以上に敵地のど真ん中で己の存在を知らしめる糞度胸は異常だ。
事実、異常事態(イレギュラー)の発生を認めた【ソーマ・ファミリア】団長のザニスが駆け付けようと、フィアナは動揺も怯えもしない。侵入者も下手人も己であるにも係わらず、威風堂々と待ち構え、眼鏡をかけた男を睨み返す。
「ソーマ様、彼女たちは?」
「知らない。ザニス、お前がどうにかしろ」
耳が痛むのか、顔を顰めながらもソーマの視線は手元の作業から離れない。ザニスの問いをあしらい、問題を丸投げする。主神という【ファミリア】の根幹にあるまじきぞんざいな態度は、ソーマの、そして【ソーマ・ファミリア】の常態なのだろう。
向き直ったザニスは、フィアナ、レイア、リリの三名を一瞥すると、勝ち誇るような笑みを一瞬浮かべた。侵入者の過半数が小人族、加えてその一方が常日頃から見下している自団員であることが、彼の余裕に繋がったのだ。
「言うまでもないことだが、ここは我々【ソーマ・ファミリア】の本拠(ホーム)だ。我が同胞(ファミリア)であるアーデに誘われ、遊びにやって来たという風でもないと見えるが、何用かな?」
「私はおたくの娘さんとパーティを組んでいる冒険者なんだけど。今日、ギルドで魔石の換金したときに【ソーマ・ファミリア】の冒険者に活動の妨害工作を受けたのよ。そのことについて文句を言いに来たってわけ」
「そういうことならば、事前承諾(アポイントメント)を取るべきだと思うがね」

「見る限り酔っ払いしかいない【ファミリア】にアポ？　冗談でしょ。言伝さえ出来ないに決まってるわ」
【ソーマ・ファミリア】には、美女の微笑み一つで氏素性の知れぬ者たちを主神の下へ行かせてしまった事実がある。フィアナのカウンターにはこれでもかというほどに説得力が搭載されていた。
インテリを装ったザニスがピクリと表情筋を痺れさせるが、彼のことは最初から眼中にない。リリは【ソーマ・ファミリア】の闇を牛耳る大悪党かのように思い込んでいるようだが、フィアナにしてみれば小悪党がいいところだ。
神酒を悪用した苛烈な暴政も、結局は酒の製作者がいなければ実現不可だ。成人した身でありながら、他人におんぶに抱っこされているだけの悪を成すだけで満足しているのだから程度が知れる。主神（ソーマ）が心変わりすれば、あるいは天界に送還された時点で、ザニスの牙城は崩れ去るほどに脆い。
「こちらの要求だけど、リリルカ・アーデの改宗（コンバート）を認めてほしいの。ついでに、今後うちの【ファミリア】にちょっかい出さないって誓いも立ててちょうだい」
フィアナはソーマ目掛けて言ったつもりだが、当の神からは返答はおろか反応一つない。『ザニス、お前がどうにかしろ』の言葉通り、かの男神は自派閥の団長に裁量の全てを託したようだ。
派閥の運営に関して、これほど無責任かつ無気力な主神もそうは居まい。それだけに【ソーマ・ファミリア】について調査しているうちに抱いた疑問は、単なる考えすぎではないと確信を得る。
「無駄だよ、無駄。お前程度ではソーマ様を振り向かせることはできない」
向こうがその気なら、こっちもその気だ。ソーマがフィアナを無視するように、フィアナもザニスに取り合わない。
視界の外で膨れ上がる、上級冒険者の怒気を受け流し、『ドン！』と力強く足を叩きつける。レベル1の小人族とは言え、【ステイタス】を持たない一般人とは雲泥の差の身体能力だ。力任せに踏み鳴らすだけでも、部屋中の物を揺らす程度のことは出来る。

椅子が揺れる、机が揺れる。振動波の只中にあって繊細な作業が出来るものか。手元の狂いを恐れたソーマは、酒造作業を中断し、胡乱な瞳をフィアナへ向けた。
「やめろ。酒造りの邪魔になる」
「邪魔されたくないなら話を聞け」
一応敵対派閥に類される【ファミリア】の主神に対し、零細ファミリア所属のレベル1冒険者の身でありながら命令する糞度胸。「マジかこの人」と言いたげなリリの視線が、ビシビシと背中に突き刺さる。
好き放題に暴れ回る幼女を止めんと一歩踏み出すザニス。しかし、彼程度の悪党では、女神に手を上げることはできない。それを看破及び利用し、彼の眼前にレイアは現れ、行く手を遮った。いざとなれば天界に送還されない程度に神威を撒き散らす覚悟を決めた、女神が防壁となっているのだから、ザニスはそれ以上進めない。
立ち往生する自派閥団長。一歩も引かない小人の幼女。それらを見て取り、ソーマは漸く話に応じる構えを取った。

十一話　交渉とは、とりあえず強気にふっかけるもの

「そこの娘の改宗（コンバート）だったか。下らないな……」

「はぁ？」

友達（リリ）を助けたい。

その一念に嘘はなく、そのためだけに一月寝る間を惜しんで、盤上を整えた。

ソーマの一言は、フィアナの想いと努力の価値を認めていないから出たものだ。かの男神に対して承認欲求を募らせる者はこの場に一人としていないが、面と向かって虚仮にされれば腹が立つ。

幼女らしからぬ低い声を吐き出し、フィアナはメンチを切る。しかし――

「酒に溺れる子供たちの、酒に呑まれる子供たちの声は薄っぺらい……」

――続く独白に、ハンドアクスに伸びかけた手が止まった。

哀愁と寂寥の気配に、フィアナは一つソーマへの理解を深める。

「そう、それがあんたの真実なのね」

酒の神ソーマが作り出す神酒（ソーマ）。それはあまりの美味しさに万人を虜にするという。ただただ美味しすぎるが故に、一口飲んだだけで下界の住民たちは、神酒を求めるために全てを差し出す餓鬼へと変貌する。

人間の口から出る、愛や友情、信念や矜持、その他の美辞麗句が一杯の酒で消え去ってしまう。それを可能とする神酒を恐ろしいと感じるのは、人間の立場に立てばこその話だ。酒の味に容易に負けてしまう、薄っぺらい精神しか持ち得ぬ弱者の視点だ。

人間がたちまち餓鬼へと堕落する様子を外側から見ていたソーマには、人間の醜さしか映っていない。醜いものを見たくないのは、神も人も同じことだ。ソーマが派閥の運営に手を出さないのは、眷属に失望し、見限っているからに他ならない。

「本っっ当にくっだらないわねぇ!!」

ソーマが愚かな下界の住人に失望したことは仕方ないのかもしれ

ない。期待を先に裏切ったのは人間なのだから、そのことについて文句をつけていい道理はない。
しかし、中毒性の強い神酒を利用したザニスの悪徳。及び神酒を求めるあまり、方々で騒ぎを起こす団員を放置していい理由にはならない。【神の恩恵】を与え、一般人を凌ぐ力を与えたのだから、手綱を最後まで握ることが最低限の責任だろう。
下界の住民に失望するまでは正当だとしても、その後の自派閥に無責任な姿勢は目に余る。それはそれ、これはこれというやつだ。
「なら賭けをしましょうか。神酒（ソーマ）を持ってきなさい。私がラッパ飲みでも何でもしてあげるから、それで呑まれることがなかったら、私の想いと言葉が真実だと認めてよ」
ソーマの無責任な堕落をこき下ろしながらも、フィアナはそこに活路を見出した。
酒造だけが趣味の男神。彼が真実、酒造にしか目を向けていないのならば、態々『神の力（アルカナム）』を禁じられる下界に留まっているはずがない。下界の住人を放置し、一人天界へと戻り、全知全能の身に戻ってしまった方が酒造は順調に進む。
ならばなぜ未だに場末の本拠（ホーム）で酒を造り続けているのか。かねてからの疑問にフィアナは一つの答えを出す。
おそらく、ソーマは下界の住人を見限った今でも、心のどこかで期待している。子供たち（人類）が神を失望させるだけの愚者ではないことを祈っている。神酒（ソーマ）に打ち克つ者を、何年も何年も待ち続けているのだ。
「そうか」
棚から酒瓶を取り出すソーマの背中に、フィアナは己の予想が正しかったのだと確信する。「ソーマ様!?」と動揺と驚愕も顕わにして喚き散らすザニスの声はもはや男神に届かず。かの神は盃に神酒（ソーマ）を注ぐと、ただ静かに裁定の時を待った。
交渉は最終段階に達した。あとはこの一杯を煽るだけ。その果てに正気を保つことが出来たのならば、フィアナの勝利だ。
「やめてください、フィアナ様！　神酒は本当に恐ろしいんです。一

口飲んだだけで、あなたがあなたではなくなってしまいます!?」
「フィアナちゃん、信じていいのよね？」
リリとレイア、二人はともにフィアナの身を案じている。
自分と同じ苦しみを味わってほしくないというリリの友情も、子を信じて送り出す母神の親愛も、どちらもが愛おしい。愛と友情はいつだって無限の勇気を生み出す、最高の魔法だ。
ゆえに、二人が見ている前ではフィアナは絶対無敵を張り続ける。
「ええ、勿論。今だって私の傍で勝利の女神様が微笑んでくれているんだもの。負けるはずがないわ！」
恐怖(闇)は勇気(光)の前には無力なり。杯を掴み取ると、注がれた神酒を一息に呷いだ。
瞬間、下の上で乱舞する美味。嗅覚を通り、脳天まで貫く芳香。記憶が沈み、自我をも蕩けさせる。天に昇るような悦楽が、『幸福』の概念を圧縮して無慈悲に叩きつける。
だが、それがどうした。フィアナの心を支配するにはまるで足りない。
美味、美酒、すなわち美食。それもまた一つの『幸福』の形ではあるのだろう。しかし、酒が与えてくれる『幸福』は、酔いが醒めれば消えてしまう、一夜の夢のようなものだ。真の幸福に優ることは絶対にない。したがって、真の幸福を知るフィアナには『途轍もなく美味しい酒』以上でも以下でもない。
「ほら、神酒(ソーマ)なんてたいしたことない」
ランクアップを果たした上級冒険者ならばまだしも、レベル1の幼女が神酒の魅了を振り切るとは思わなかったのだろう。ザニスは「あり得ない」と、ただそれだけを譫言(うわごと)のように繰り返し、試練を課したソーマでさえ目を見開いていた。
「そ、そうだ！　何か小細工を弄したに違いない！　口の中に酔い覚ましでも仕込んだか、それとも手品師よろしくそもそも飲んでいないのだろう!?　そうだろう!?」
「散々人の力で威張り散らし、いざ自分の理解を超える事態に直面すれば取り乱す」

己の優位を確信できる状況でしか戦えない。それがザニス・ルストラの限界であり器なのだ。
神酒の悪用を思いつき、何年も続けたことで、彼の懐は潤った。その代償に、彼は『冒険』に挑む勇気を失ってしまった。財布が膨らもうと、心臓が鼓動を打っていようと、もはや彼は冒険者として死んだも同然だ。
「だからあんたはいつまでも三下なのよ、ヒョロガリ眼鏡」
前に進む気概を失った死者が成長できるものか。死者に待ち受ける未来は、打ち捨てられるか、土に埋められるか、何れにせよ落ちるだけだ。
「貴様ぁ、小人の分際で調子に乗るなよ!?」
「違うわ。これはね、余裕って言うのよ。
ねえ、ザニス。ザニス・ルストラ。闇派閥との関係を持つあんたとの対決が予測される、この場に赴くのに、私たちが保険の一つも用意していないとどうして思うのかしら?」
千年もの永きに渡り、最強の座に君臨し続けた【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】。巨大にして強大なる二派閥の壊滅を機に始まったオラリオの暗黒期。
かの時代に邪神を名乗る神々に率いられた闇派閥(イヴィルス)は、都市全体に甚大な被害を齎し、名実ともに『迷宮都市(オラリオ)の闇』となった。しかし、都市の守護に回った派閥も決して弱者ではない。破壊と守護、二極化された二つの陣営の抗争は激化の一途を辿り、敗れたのは闇派閥だった。その後、方々で恨みを散々に買っていたことが災いし、【疾風】の二つ名を背負う冒険者に止めを刺された、とされる。
闇派閥の脅威は、壊滅してから数年の歳月が経過した今でもなお人々の記憶に色褪せることなく残っているが、敗北したことは確かだ。すでに過ぎ去った歴史と広く認知される。
「私が闇派閥と繋がっている? 奴らは既に壊滅したはずだろう。何を馬鹿なことを言って――」
過去の残骸と手を取り合っているなど戯言だ。あり得ない。
人格は最低だが、ザニスの口から零れる主張は正当性に満ちてい

る。恐らく、前々から保身のための口上を練っておいたのだろう。脂汗を滲ませながらも、舌だけはよく回る。
皮肉と称賛を浮かべながら、フィアナは一つ一つ事実を紐解いていく。
「闇派閥は壊滅した。それは間違いない。けれど残党は生きている。野兎みたいなものよ。野山を駆け回り、巣穴に引っ込むこともある獣を一匹残らずとっ捕まえるなんて現実的じゃない。獣より遥かに頭の良い人間ならば尚の事。逃げ果せる奴や地下に潜伏したやつは絶対にいる」
都市の破壊や破滅を目論む闇派閥は、常人には理解し難い思考回路を持つ異常者だが、心身を持つ人間だ。衣・食・住の三つが足らねば生きてはいけない。表に出ればたちまち牢屋に放り込まれるか断頭台送りとなる残党たちが接触できる相手は、脛に傷を持つ者に限られる。
残党たちは生きていくための物資が手に入り、交渉相手は汚れ仕事を任せる人材を得る。ここに汚物と汚物の共生関係が成立するわけだ。
「そこまで推測が立った時点で、私とレイア様は【イシュタル・ファミリア】に目を付けたの。……これだと語弊があるか。
夜の街には酒が欠かせないのだから、神酒を持つ【ソーマ・ファミリア】と繋がっているだろうと睨み、元から目は付けていた。闇派閥とも手を結んでいる可能性が浮上したことで優先順位が繰り上げされたってのが正確なところね」
都市有数の大派閥【イシュタル・ファミリア】は、歓楽街の数割を支配下に置くまさに女王。毎夜荒稼ぎし、管理機関（ギルド）にも多額の税金を納めている。風俗業一つとってみても、一級の商業系ファミリアと言えるが、【イシュタル・ファミリア】は探索系ファミリアとしての顔も持つ。
商業と迷宮探索。二つの方向で多大な力を得た【イシュタル・ファミリア】は間違いなく、都市有数の大派閥である。
しかし、力ある者が善良さまで備えているとは限らないのが世の常

だ。況して、【イシュタル・ファミリア】の領土は歓楽街だ。人の欲望が跳梁跋扈する街は、悪意と繋がり易い。「大きな力を得てしまったのならば、むしろ繋がっていない方が不思議」とまで女神(レイア)は断言した。

そして主神(レイア)の援護を受けた、眷属(フィアナ)が参戦した。彼女の数少ない技能が活きる。

リリが【ソーマ・ファミリア】の呪縛から中々脱することができなかったように。力に乏しい小人族の多くは暗い過去を持つ。フィアナも故郷で恵まれた生活を送っていたわけではない。

小人の人生には、差別と迫害が当たり前だ。日常的に人の悪意に晒されるのだから、その手の感情には敏感になり、また対処の方法も心得る。リリが冒険者を標的とした盗人に落ちたように、フィアナもただの天真爛漫な少女ではいられなかった。

明るい笑顔の下には、冷たい刃を隠し持つ。敵(ザニス)を前にして見せる、冷徹な顔がまさにそれだ。人の悪意を嗅ぎ分け、見抜き、徹底して追い詰める。

「あそこの派閥はドブ以下の臭いをプンプン振り撒いてるから、調べるのは簡単だったわ」

歓楽街は、オラリオに必須の存在だ。冒険者という荒くれ者たちの欲望を発散させる場がなければ、どこで爆発するか分かったものではない。

それゆえに、娼婦を仕入れる人身売買を始め、歓楽街の法(ルール)はギルドにも黙認されている。歓楽街の女王たる【イシュタル・ファミリア】にいたってはその傾向がより顕著であり、その規模と力故に誰も文句を言えない。

悪行三昧であろうと追及を受けないのだから、当然手を広げる。より成果を上げるために反則も行う。その一つが闇派閥との取引だ。

【レイア・ファミリア】は新興かつ無名の派閥だ。そのため、どこの勢力も完全に無警戒(ノーマーク)。人の油断を引き出す小人の容姿と、海千山千の女神の話術を以てすれば、情報を集めることは容易であった。

「だから何だと言うんだ。仮に、仮にだ、かのファミリアが都市の闇と手を結んでいたとして、そんなことは私には関係のない話だろう。一

体どうして【ソーマ・ファミリア】に飛び火する」
「闇派閥と仲良しこよししておきながら、デカい顔で都市に君臨していられる大派閥。小悪党(あんた)から見て、これほど良い取引相手はいないって話よ」
ザニスが【イシュタル・ファミリア】に卸した商品は『美しく若い女』と『神酒(ソーマ)』だ。つまり娼婦の候補と、それを繋ぎ止める縛鎖である。
彼の手口は突き止めれてみれば、種も仕掛けもない。
街で見かけた美女に声を掛け、酒場に連れ込む。事前に手を回し、店主に渡した神酒を女に飲ませて魅了が完了した後に【ソーマ・ファミリア】の本拠へと連れ込む。適当に遊び、愉しみ、飽きた末に【イシュタル・ファミリア】に売り飛ばすだけだ。
ギルドが歓楽街の法を静観している以上は、【イシュタル・ファミリア】との取引で罰則は下されない。加えて、犯行の中核を担う神酒はただの酒だ。天井知らずの美味ゆえに麻薬以上の中毒性を持つ、ただの酒。有害物質は含まれず、製造過程も真っ当そのものであるから、ギルドも製造停止の処分を下し難い。
取引相手の【イシュタル・ファミリア】からしても、旨みの多い話だ。まず、娼婦という寿命の短い商品の安定供給が確約される。しかも、望まぬ形で歓楽街に落とされた彼女たちも、神酒を飲ませて虜にしてしまえば従順だ。神酒を求めて進んで春を売り、在りし日の日常への逃走など思い浮かびもしない。
「神酒(ソーマ)と【イシュタル・ファミリア】の性質を良く理解した商売だと思うわよ？　足りない頭でよく考えたものだわ、褒めてあげる」
ザニスが犯した最大の失敗。それは、フィアナのような人種を仮想敵に含めなかったことだ。
都市の憲兵や管理機関には決して摘発できない【ソーマ・ファミリア】の牙城。しかし、その守りは『道理も秩序も知ったことじゃねえ』と突っ走る者たちには紙も同然。
神酒は類稀な技術の産物であり、合法の品である。――それがどうした。

【イシュタル・ファミリア】との取引は、都市の維持のために黙認すべし。――知ったことじゃない。
全ては友のために。友の涙の上に建てられた秩序や安寧に価値は無し。
「ところで、私のご尊顔に見惚れて、私の美声に酔い痴れるのも良いけど、あんまりゆっくりしてると死んじゃうわよ？」
「……なに？」
小人族の幼女に、レベル２の強者が命を脅かされるという不可思議。荒唐無稽にして意味不明。『レベルの差は絶対』という真理を覆す妄言も、しかしフィアナの真剣な面持ちが鼻で笑うことを許さない。
「闇派閥にとっての恐怖の象徴。堕ちた正義の剣。苛烈なる復讐者（アベンジャー）。【疾風】があと少しでやってくるわ」
「はっ！　何を言いだすかと思えば馬鹿なことを。奴は三年前に消息を絶ってからそれっきりだ。生きているはずがない！　縦しんば生きていたとして、どうやって渡りをつけると言う？
【イシュタル・ファミリア】の闇の一端を掴んだこと、連中との取引を推理してみせたことまでは評価してやるが、所詮は子供だな」
神々は例外なく下界の子供たちの嘘を見抜く。それを知るからザニスは否定を口には出さなかった。ただフィアナの謎解きを推理と扱き下ろす。
犯罪の手口が極めて狡猾であることも含め、『ギリギリの線（ライン）』を見極める慧眼だけは大したものだ。
「物証があるわけでもないんだし、そりゃ白（しら）を切るか」
フィアナは小さく溜息を吐く。その挙動には、獲物を仕留める機会を逸した後悔や、逆転されるかもしれないという焦燥がない。まるで「一手増えるから面倒だ」とでも言わんばかりに、己の盤石を確信している。
なぜなら、ザニスの往生際の悪さも想定の内なのだ。
悪人にもやむにやまれぬ事情があった、あるいは土壇場で改心する。そのような優しいご都合主義には最初から期待していない。期

待するには、フィアナは汚いものを多く見過ぎた。
だからこそ、仕留めるべき時に確実に仕留める。詰めを甘くはしない。
「私が開陳した『事実』を、あんたは『推理』だと言う。平行線になるだけだし、その是非を問うつもりはないわ。ただ、真実かどうかは自分の胸に聞きなさい。
ただ、もう一つ私の忠告も聞いておくべきね。あんたの罪と大派閥の闇。この二つを暴いた私たちが、女一人の行方を掴めないとどうして断言できるの？」
ギルドやその他の派閥の目から隠れる悪知恵。そこには相応に自信と自負があったのだろう。年を重ねた実績もだ。
仮に指摘されても、口だけならば幾らでも強がれるし、白も切れる。けれど、犯行に自信があったからこそ、それを暴き立てた探偵の情報収集能力には舌を巻く。
つまり、ザニスの悪知恵がそのままフィアナの言の保証となるのだ。もはや言い逃れの余地はなく、また言い逃れする意味がない。韜晦したところで、首を撥ねられてしまえば、全てはお終いなのだから。
己の死の未来を幻視し、蒼白となったヒューマンが膝から崩れ落ちた。
「神酒に呑まれなかった瞬間に、私の勝利は確定したの。あんたはそれにも気付かず、無様に喚いていただけ。とんだ間抜けね。もう一度言うわ、だからあんたは三流なのよ!!」

十二話　『明日』は誰かに手を引かれて行くものじゃない。自分の足と意思で行くものだ

【疾風】のレベルは、第二級冒険者にも列せられる４。レベル２のザニスでは勝利の糸口すらつかめない絶対強者である。【疾風】が襲来した瞬間に、彼の死は確定する。

だからこそ、フィアナは蜘蛛の糸を垂らす。

「安心なさい。私たちを無事に帰してくれたら、【疾風】の出撃要請も解除してあげるから。あんたが妙な抵抗をして時間を潰さなければ、十分に間に合うはずよ」

追い詰められた獣は何をするか分からない。逆上して襲われでもしたら、リリとフィアナの命はない。ザニスにとって【疾風】が強者であるように、レベル１のフィアナたちからすれば、ザニスは比類なき難敵なのだ。

戦わないに越したことはない。逆上した挙句に剣を取るという選択肢を消滅させるために、逃げ道を用意した。

「……本当か？」

「嘘を吐くメリットがないでしょーが。自室に戻って自棄酒でも飲んでるうちに、全ては終わるわ」

「……そうさせてもらう」

力なくフラフラと主神の部屋を出ていく男の背を見送ると、フィアナはソーマへと向き直る。リリの改宗のために、ザニスへの対応は必須であったが、重要度で言えばソーマの方が遥か上だ。消えた脇役に割く意識はない。

「話を本筋に戻しましょ。リリの改宗を許してくれるのよね？」

「ああ。お前の想いの丈と願いの真を見させてもらった。ならば、私が応えないわけにはいかないだろう」

酒神はリリを呼び寄せる。その際に、自身の【ファミリア】にリリルカ・アーデという小人が居たことさえ知らなかったと判明し、女神（レイア）から折檻を受けるという一幕があった。

子を軽んじるという行為は、母神である彼女には耐え難かったのだろう。ソーマを攻め立てるレイアの覇気といったら、ザニスを虐めたフィアナでさえ身震いするほど。

母は強し。真（まこと）、古くからの格言を体現する女傑である。

場のヒエラルキーが決定し、いざリリの改宗（コンバート）が行われんとするとき。『待った』の一声を掛ける人物がいた。他ならぬリリである。

誰よりも改宗を願った彼女の、願いとは相反する一声だ。意図を測りかねるが、無視することは出来ない。

「ソーマ様。改宗する前に、リリに神酒（試練）を飲（与）ませてくれませんか？」

【ソーマ・ファミリア】を去るから、その最後に酒に溺れたい。そのような甘い考えではない。

リリはフィアナを正面から見据える。恐怖（ザニス）の象徴（ス）を圧倒した、怜悧な幼貌から逃げない。

「フィアナ様は言ってましたよね。一緒に過ごした時間は嘘じゃないと。リリもそう思いたいんです。

例え念願の改宗が叶ったとしても、全てが人任せでは胸を張れない。きっと二人で過ごした時間を、これから過ごす日々を穢してしまいます」

待ち望んだ『明日』は誰かに手を引かれて行くものではない。自分の意思と足で行くことに意味があり、だから価値が生まれる。

敵（ザニス）へと突き刺した冷酷なる刃は、紛れもなくフィアナの真実だ。

けれど、リリと冒険する最中に見せた、大輪の笑顔もまた彼女の真実である。

つまるところ、リリを救うために、フィアナは余人から見て『冷酷』と評されるほどに刃を研ぎ澄ませただけ。彼女の冷酷さは、そのままリリへと向ける親愛の情の多寡でもある。

フィアナはリリのために、酒の神に啖呵を切った。神酒を飲み、打ち克ってみせた。レベル2（ザニス）を打倒した。

偉業を三連続で達成するだけの黄金の覚悟の煌めきを間近で目撃しながら、ただその恩恵に甘えるなど厚顔無恥にもほどがある。そんなことをしてしまえば、リリルカ・アーデは闇から抜け出す資格を失

う。盗人よりも余程卑しい咎人へと落ちる。
リリはフィアナと冒険するために。フィアナの隣に立ち続けるために、自らの意思で踏み出さなければならない。
「ほぇぇ、リリが良い子すぎる〝ぅ〟」
神酒に対する心傷(トラウマ)から震えながらも毅然とした態度を取るリリに、絶対零度の眼差しは春の雪解けを迎え、フィアナの涙腺は大歓喜した。
ザニスが消えて気が緩んだこともあり、滂沱の涙を流し、鼻水もまた然り。急激に湿地帯の広がる顔面のまま、リリに抱き着き頬を擦り寄せる。
「親戚のおばちゃんか何かですかっ。って、私にも付きますからやめてください!?」
涙と鼻水の特製ブレンドを、プライスレスでプレゼント。湿地帯は、その領域をリリの容貌にまで拡大した。
友の頼みを聞き入れたフィアナは顔を離すが、心の猛りは収まらず、顔面出身の水流も勢いを衰えさせない。故に、手近なところにあった布(ローブ)を使って涙を拭き、鼻をかんだ。
「ぎゃー!? リリの一張羅に何をしてくれてるんですか、この方は!」
湿ったローブと、顔面を伝う濁った白液の痕跡。その立ち姿は、全身を無数の蛞蝓(なめくじ)に這い廻られたが如し。
リリの女としての尊厳は、シリアスな空気諸共フィアナによって凌辱されてしまった。
「話を、進めてもいいだろうか」
フィアナに外された話の流れを、蹴り飛ばして本筋へと戻す酒神(ソーマ)。リリの中で彼に対する尊敬の値が上昇する。尤も、元々がマイナス値なので未だ零にすら届かないが、大きな快挙である。
姦しさ前回の空気は、男と言うだけで居た堪れないであろうに、平然と踏み入っていく勇気。これぞ神だ。
「リリルカ・アーデ。お前が望んだ試練(ソーマ)だ。悔いなきよう挑むといい」
酒瓶を傾け、盃を神酒(ソーマ)が満たす。匂い立つ夢幻の幸福の気配が、事態の転換を告げた。

リリは、そして一度は神酒に勝利を果たしたフィアナも、遊んではいられない。香りだけでも、神酒は油断ならぬ存在なのだ。
「っ」
受け取った杯の、水面に映るリリの顔は揺れていた。あるは、盃を持つ手そのものが震えているのかもしれない。
虚像と視線を交わらせているだけで、過去の苦痛が鮮明に蘇る。
【ソーマ・ファミリア】の団員たちの狂乱。子を庇護すべき親の不在。助けを求めて伸ばした手を、慈悲なく叩き落されたこと。小人族だから、サポーターだからと、冒険者たちから加えられた数々の暴行。何よりも、神酒が齎した、絶大な幸福(魅了)。
いずれも恐ろしい記憶だ。恐れて幼子のように震えても、誰も責めやしないほどの深い闇。底の見えない谷に引き摺り込むかのように、神酒は妖しく輝く。
呼吸を荒くするリリを、フィアナはそっと背後から抱きしめた。
「一人じゃない。私も一緒だから心配しないで」
「……一つ聞かせてください。フィアナ様はどうやって神酒の魅了を振り払ったんですか？」
フィアナの一言で、全身を包む寒さは消えた。触れ合う人肌の温度が恐怖を晴らす。
リリは、答えの分かり切った問いを投げた。
「そんなの簡単よ。レイア様に『いってらっしゃい』と『おかえりなさい』を言って貰えること。リリと一緒に冒険したこと。
掛け替えのない毎日(幸せ)を思えば、惑わされたりしない」
「ですよね。――知ってました」
フィアナに倣い、杯に満ちる神酒を一口で飲み干す。
リリが試練を突破できたか否かは言うまでもあるまい。

十三話　後日談

リリルカ・アーデは無事【ソーマ・ファミリア】から【レイア・ファミリア】へと改宗（コンバート）したが、一件落着とはならない。

リリもフィアナもレイアも、社会に属する、オラリオの一市民だ。他者との関わりは避けられない。リリのための【レイア・ファミリア】主従の動きは、小さな波紋となって方々に影響を及ぼしたのだ。

言うなれば後日談。これを語らずして、一件の幕は引けたなどとは言えない。

最も大きな動きがあったのは【ソーマ・ファミリア】だ。一連の騒動により主神ソーマも考えを改めるところがあったらしく、リリの改宗完了後、派閥の浄化に乗り出したのである。

まず団長のザニス・ルストラを【ファミリア】が所有する牢へと放り込み、加えて団長の任と権限を取り上げた。後任は彼と並ぶレベル2のドワーフ、チャンドラ・イヒトなる人物が選出されたとのこと。

一般団員については、その多くが神酒に酔い痴れていたため、酔いが抜けるまで牢へと閉じ込め、正気を取り戻させた。ソーマが「神酒を今後作るつもりはない」と明言するや、激高する者もいたが、多くは神酒の恐怖を知るが故に黙って頷く。次いで『派閥に残留するか否か』を問うと、その足で本拠を飛び出していく者と、残る者に分かれた。後者は、神酒に酔っている間に行ってしまった横暴に罪悪感を覚えていたり、そのことの贖罪をしたいのだという。

当然、主神（ソーマ）はこれを受け入れた。神酒が無ければ、当たり前だったかもしれない眷属の優しさだ。眷属の心を神酒で捻じ曲げてしまった責任を取るためにも、ソーマには彼らの面倒を見る以外の選択肢はない。

成人した団員の処遇については、ザニスのような悪人でもなければ、その自由意思に任せれば良い。しかし、判断能力の低い子供はそうもいかない。そして、この少年少女たちの処遇が極めて難しい問題だった。

親が【ソーマ・ファミリア】に所属していたために、生誕した瞬間

から【ソーマ・ファミリア】に加入することを決定づけられた子供たち。リリルカ・アーデと同じ立場の彼らは、彼女と同種の思考を育んでいた。

大人は信用すべきではない。【ソーマ・ファミリア】は一刻も早く脱するべき地獄。

『ファミリアに残るか否か』を問われれば、当然出ていくことを選びたい。それが本心ではあるが、行く宛がないことも確かだ。主神（ソーマ）の立場からしても、自衛できるかすら怪しい幼子たちを放り出すわけにはいかない。

『お父さんもお母さんも嫌い。もう叩かれたくない』

リリのように既に両親を亡くしている子供もいるが、そうでない子供もいる。両親が存命であるからといって、幸福と言い切れないところが、この問題を難しくしている。

神酒に酔った親が、子に行った乱雑な扱い。これによって親子の関係は破綻していた。子にとって親は恐怖の対象でしかない。正気を取り戻した親にとっては、我が子から向けられる恐怖に満ち満ちた視線が何にも勝る苦痛だが、受け入れるべき罰でもある。

とはいえ、親に罰を与えるためだけに、嫌がる子供を親元に縛り付けることは余りにも無慈悲だ。親に罰を与えることよりも、子に救いを与えることの方が何倍も重要だ。

そこで救いの手を差し伸べたのが、母神（レイア）である。リリから同じ境遇の子がいることを聞いていた彼女が、涙を流す幼子を見捨てるはずがない。

同郷かつ友神（ゆうじん）の鍛冶神（ヘファイストス）や地母神（デメテル）に渡りを付け、協力を要請した。

『眷属の候補として、手元に置いてあげてもらえないかしら？』

ヘファイストスもデメテルも、名高き神格者（じんかくしゃ）であるが、下界においてはそれぞれが鍛冶系・農業系【ファミリア】の主神だ。つまり商人であり、リターンのない取引には応じない。

レイアの『子供たちを救いたい』という願いは清廉だが、無理に押し付ければ我儘に零落する。気が遠くなるほどの歳月を生きたレイアが、友神に我儘を強いるはずがない。

彼女は、少年少女の身元を引き受ける明確なメリットを提示した。
『子供はあなたたちから衣・食・住を提供してもらう。あなたたちは、小さな労働力が手に入る。
働く子供に何かの素養を見出せたのなら【神の恩恵(ファルナ)】を与えて、正式に眷属とすれば良い』
引き取った幼子の全員に眷属とするほどの魅力が無かったとしても、労働力を得られるのだから損はない。それどころか、金の雛鳥が一人でも混ざり込んでいれば大儲けだ。
少々賭けの要素はあるが悪くない取引を、二柱の女神は承諾した。
『もう二日間休んでいない。眠らせてくれ』
『「もう」ではなく、「まだ」でしょう？　キリキリ働きなさい』
レイアが最も活躍した場面は子供たちの処遇の決定だが、それ以外の場面でも活躍著しい。連日連夜【ソーマ・ファミリア】の本拠(ホーム)へと突撃し、主神(ソーマ)を馬車馬の如く働かせることによって派閥の浄化はハイペースで進んだ。尚、週休二日、ただし勤務日は徹夜が原則という労働環境にソーマの目が死んだ。
主犯(レイア)の供述によれば「天界に強制送還(死ぬか死なないか)されるかどうかのラインはちゃんと見極めてるから問題なし」とのこと。実際、彼女はソーマが天に召される数ミリ手前で休憩を与え、その後にまた過酷な労働を強いるのだから、性質(タチ)が悪すぎる。
そしてこれら全ての動きを、管理機関(ギルド)が支援した。
査定所の担当官である、禿頭の職員。【レイア・ファミリア】の担当受付嬢エイナ・チュール。彼と彼女の二人が、愛すべき小人幼女のために立ち上がったことに端を発する。
フィアナとリリの絡みに日々癒されていた他の職員たちまでもが触発され、「【ソーマ・ファミリア】の問題を放置するのであれば、職員一同ボイコットする」と上層部に嘆願(を脅迫)した。
そもそも【ソーマ・ファミリア】団員の粗暴な振る舞いには、市民からも苦情が寄せられ、しばしば問題視されていた。苦情を受け付ける職員たちからすれば、【ソーマ・ファミリア】は胃痛の種だ、好く理由がない。溜まりに溜まったフラストレーションは遂に限界を迎え、

過激な運動に走らせたのである。
上層部の考えが何であれ、現場の人間がいなくなれば、ギルドという大組織も機能が停止する。【ファミリア】間の問題には首を突っ込まないことを基本としていようと、重い腰を上げないわけにはいかなかった。
ギルドとレイアの尽力。何よりソーマが犠牲となったおかげで、リリが改宗してから僅か半月という驚異的な速度で派閥の膿が吐き出された。
中堅規模とは言え、最高級の酒の醸造を可能とする【ソーマ・ファミリア】は、酒好きのドワーフや神の間では知名度が高い。彼らを絶望の淵に叩き落す「神酒はもう製造しない」宣言も手伝い、かの【ファミリア】が新たなスタートを切ったことは、情報誌にも記載され、市井に賑わいを供する。
「色々あって遅くなっちゃったけど！　リリの【レイア・ファミリア】加入を祝して！　かんぱぁぁぁぁぁいっ!!!」
「乾杯」とフィアナの音頭に続く二つの声。
団員が一人増えた、【レイア・ファミリア】の主神と、新入り眷属が果実水入りのコップをぶつけ合う。
場所は【ファミリア】御用達の酒場『豊穣の女主人』。真昼間から騒ぐのは気が引けたため、夕日が落ちてからリリの歓迎パーティーが開催された。
【ファミリア】の財政は厳しいながらも、せっかくの祝い事の席なのだから大奮発した結果、三人が囲う卓上には様々な料理が置かれている。大皿から小皿へと取り分けた美食に、それぞれが舌鼓を打つ。
家族と一緒に食事を摂る。ただそれだけのありふれた日常。その大切さを以て神酒（ソーマ）の誘惑を断ち切った、リリとフィアナはこの場に至るまでの軌跡を回顧する。
「【ソーマ・ファミリア】から抜けて、誰に虐げられることもなくて、後ろ暗い思いをせずに美味しいご飯を食べられるなんて……上手く行き過ぎで今でもちょっと信じられないです」
多くの人間が当たり前に享受している日常も、リリにとっては宿願

だ。しかし地獄が生まれてから続いたために、激変した環境に現実感が湧かないのだろう。
「トントン拍子に事が進みましたけど、どこからどこまでがお二人の計画だったのですか？」
改宗の手続きは、【神の恩恵（ファルナ）】を与えた主神にしか出来ない。つまりリリの救出作戦の最終段階におけるキーマンは酒神（ソーマ）だ。しかし、以前のソーマは引き篭もりであったため、その神格（じんかく）は人伝に聞くしかない。
肝心な部分に生じる、情報の不確実性は厭うべきものだ。確実性を得られる手法があるのならば飛びつくが、所詮はない物ねだり。存在しないものは無いと割り切り、臨機応変な動きを心掛けるしかない。
細かい部分を詰められないのだから、リリの救出劇について事前に定められたものは大筋だ。『計画』の呼び名も、言うなれば張子の虎。それを開陳するとなると、成功した誇らしさよりも気恥ずかしさが優る。
フィアナとレイアの視線が交錯し、「どうぞどうぞ」と説明の役を譲り合う。勝者はフィアナ。レイアが会話のバトンを受け取った。
「事後処理については完全に予定外よ。ソーマが改心して派閥の浄化に乗り出すなんて思いもしなかったもの。
私たちが見越していたのは、リリちゃんをうちの【ファミリア】に移籍させるまでね」
具体的には、ザニスを陥落させる手順だ。
ソーマはリリの移籍に必須の神物だが、伝え聞く神格からして要求を突き付けても手痛いしっぺ返しを受ける可能性は低いと踏んだ。対するザニスは、人を傷つけ、虐げることを何とも思わない悪党である。リリの【レイア・ファミリア】への改宗が叶ったとしても、彼を放置しておけば、何をされるか分かったものではない。
主神（ソーマ）と団長（ザニス）、【ソーマ・ファミリア】の中核たる二人のうち後者の方が危険性は高い。本拠を留守にしていない限り、ソーマとの謁見を邪魔するに違いなく、小悪党の排除は必須だった。
しかし、彼はレベル2。新米冒険者（フィアナ）が腕っぷしで敵う相手ではな

い。
だから、頭を使った。鉄の刃で切り結ぶ決戦ではなく、舌戦を持ちかけた。殴り合いならば【ステイタス】の優劣が勝敗に直結するが、口喧嘩はそうではない。
「ザニスを負かす。これを果たしたのなら、残る仕事は一つだけ。ソーマに眷属の移籍を頼む。こっちについては特に心配することも無かったわ」
神から与えられた試練を、子供(人間)が乗り越える。これが、人と神が『古代』から続けてきた関係だ。
悪神も善神も、男神も女神も、下界の子供たちが試練を乗り越え成長することを期待しているのだ。本気で期待しているから、見事応えてみせた勇者に報酬を与えることに否やはない。
フィアナはこの関係性を逆手に取った。与えられた試練を乗り越えた末に報酬を賜るのではなく、要求を突き付けてからそれに相応しい試練を寄越せと宣ったのである。
傲岸不遜な挑戦を、しかしソーマは無視できない。神の一員だからこそ、試練に挑む子供の輝きと、その先を見てみたいと願ってしまう。
会話の流れから、試練の内容が精神力だけで解決できるものとなったことは僥倖だ。さしものレイアとフィアナのタッグと言えど、【ソーマ・ファミリア】に乗り込む前から、試練を特定の内容に落とし込むために会話を誘導することまでは煮詰められなかった。
だが、些末なことだ。ソーマという神の性質上、無理難題の試練を押し付けはしない。極端に難易度が高い場合も、期限には日数を設けるだろう。少なくとも、【ソーマ・ファミリア】本拠からの帰路の安全性は確約される。
ならば、上々だろう。後手に回ろうと、時間さえ持てたのなら、大概の課題は解決できる。そう豪語するだけの人脈と神脈が二人にはあった。
「他に何か訊きたいことはある？　今だったらフィアナちゃんが何でも答えてくれるわ」
「えっ、何それ聞いてない」

「私が今、話し手をやったんだから、次はフィアナちゃんの番」
「じゃあもう一つだけ。ザニス様を言い負かすときに色々とビッグネームが飛び出したことによる危険はないのですか？」
闇派閥の悪夢【疾風】と、歓楽街の支配者【イシュタル・ファミリア】。
個人と組織という違いこそあれ、どちらもが都市有数の強者である。しかも、前者は元賞金首であり、後者は腹が真っ黒に染まっている。利用するにも、ちょっかいを出すにも危険すぎる相手であるというリリの認識は尤もだ。
とはいえ、本当に危険であるのならフィアナも手を出してはいない。危険が大きいように見えて、その実、極小であると判断した理由を今更ながらにリリにも伝える。
「件の冒険者は、もう何年も前に失踪してる。私の話をザニスが信じた理由は、あいつの胸の中にしかないんだから、誰かが同じ話を聞いたって鼻で笑うだけよ。ザニスが最初、真面に取り合わなかったようにね」
ミアに渡した手紙――【疾風】の生存と、彼女との縁故を示唆する唯一の物証――も回収し、ビリビリに破いてから焼き捨てた。証拠がない以上、【疾風】の名を用いた脅迫は『幼女の妄言』の域を出ない。
「派閥の方だって、私たちに手を出しやしないわ」
縁も所縁（ゆかり）もない零細ファミリアに大派閥が重い腰を上げる。その行為は、意味不明にして理解不能だ。違和感の塊でしかなく、即ち『未知』を求めて下界に降りてきた神々の恰好の餌となる。
真っ黒に染まった腹を探られたところで、【イシュタル・ファミリア】の性格からして強気に突っぱねるだろう。損害を受けるような下手は打つまい。
しかし、煩わしい。手間がかかる。面倒だ。
団員が小人族の女児二人しかいない零細ファミリアでは、万が一にも都市有数の大派閥の脅威にはならない。したがって、デメリットを許容してまで、潰すほどの価値が【レイア・ファミリア】にはない。
「【イシュタル・ファミリア】からすれば、【レイア・・ファミリア】な

んて子犬以下よ。噛み付かずに、尻尾を振りながらお腹を見せて、無害をアピールしていれば踏み潰されることはないわ」

第二章　闇の落とし子

十四話　第四階層

女神（レイア）は積極的に【ソーマ・ファミリア】の掃除に関わっていったが、眷属たちは別だ。フィアナとリリには、そのための知識も経験もない。

素人に出しゃばる幕はなく、蚊帳の外に置かれた二人は、世間の喧騒を他所に地道にダンジョンに潜り続けた。そして、リリの歓迎会を行った翌日、【レイア・ファミリア】は晴れて四階層へと迷宮探索の範囲を広げたのである。

「はい、とーちゃく！　ここが第四階層……あれね、空気とかがたぶんきっとおそらくこれまでとはかなり違うわ。ゴクリンコ」

「適当なことを言ってないで慎重に行きましょうねー」

最弱のモンスターとして名高いゴブリンとコボルトが出現する階層は、この四階層が最後だ。そのことから、この階層の突破を、新人冒険者脱却の指標と見ることも出来る。

然らば、一つの関門に挑む者として、気合も入ろうというものだ。冗談を飛ばしつつも、油断は一切ない。普段通りの掛け合いを介し、程よく肩の力が抜けた小人コンビはゆっくりと階層の探索を開始する。

地図（マップ）を購入し、『正規ルート』と呼ばれる次階層への道順を把握しているが、敢えてそこからは外れる。

進出したばかりの階層であるが故に、フィアナにとっては『未知』が溢れている。一寸先は闇とはこのことである。未知を既知に換えない限り、どこに落とし穴が隠れているか分かったものではない。

たった二人のパーティであるが、彼女はパーティのリーダーなのだ。サポーターとして四階層より先に進んだこともあるという、リリの知識にばかり頼るわけにはいかない。

非力な小人族だからそれぞれに役割を振り、それに殉じればよいなど惰弱の極み。他の種族に劣るのだから、誰よりも貪欲に飢えなけれ

ばならないのだ。
技を磨く。知識を得る。道具を作る。経験を重ねる。作戦を立てる。連携能力を高める。
それでもまだ全く足りない。可能・不可能の話ではなく、全てに手を伸ばし手中に収めると豪語する気概無くして何を成せる。
負け犬の遠吠えという諺があるが、ならば吼えることさえできなくなった人間は犬以下だろう。
「ちぇいあああ！」
気合一閃。会敵したゴブリンの首を刎ね飛ばす。
休む間もなく、倒れ込むモンスターの亡骸を踏み越えて迫る影は、ダンジョン・リザードだ。唾を飛ばしながら大きく開いた咢から、フィアナは転がって逃れる。
「――っ。フィアナ様、今です！」
前衛がモンスターの正面から退いたおかげで、後衛（リリ）の射線が通る。すかさず引いたボウガンの弦が、短矢を吐き出した。
戦場は狭い通路で、的は機動力に優れない蜥蜴だ。吸い込まれるように、ダンジョン・リザードの体を短矢が穿つ。
痛みに呻いたその隙を、小人の二人組（リトル・タッグ）は逃さない。
「まっかせなさーっい!!」
「キラリン！」と目を輝かせ、フィアナは手斧を叩きつけた。
飛び散る赤血。重厚な刃は、大蜥蜴の背中から胴部の半ばまで届き、背骨を寸断している。
ダンジョン・リザードは呼吸こそ続けているが、致命傷だ。数分と経たずに息を引き取ることだろう。
「よいしょっと」
無駄にモンスターを苦しめて悦に浸る嗜虐趣味者（サディスト）ではないため、抵抗する余力のない蜥蜴の頭を割り、止めを刺す。
リリから魔物の解体及び魔石の摘出方法について教わりながら作業を完了させれば、探索の再開だ。
四階層に出現するモンスターとは、一～三階層でも戦える。より深い分四階層の個体が強いとされるが、その差は微々たるもの。これま

での道のりで培った経験があれば、何てことはない。
「そう言えば、リリって最大で何階層まで潜ったことあるの？」
「確か八階層ですね。六階層では『フロッグ・シューター』と『ウォーシャドウ』、七階層では『キラーアント』って具合に、新モンスターが続々と出てくるので肝が冷えました」
『フロッグ・シューター』は舌を伸ばした打撃攻撃が得意技だ。初の遠距離攻撃を持つモンスターのため、新人冒険者は軒並み対応に苦慮する。
『ウォーシャドウ』は真っ黒な人影の如き外見をしている。耐久こそ低いが、攻撃力と機動力に秀でた白兵戦士だ。
『キラーアント』は鎧のような外殻による防御力を自慢とする、蟻型モンスターである。ただし、最大の脅威は防御力ではなく、『瀕死状態に陥ると仲間を呼び寄せる』習性にある。下手に手古摺れば、次から次へと仲間を呼ばれてしまい、巨大なモンスターの津波と化し、犠牲となった冒険者は少なくない。冠された異名は『新米殺し』。
いずれも現在のフィアナたちには、荷が勝つ難敵だ。ただ漫然と【ステイタス】を高めるだけではなく、具体的な対策も練っていく必要があるだろう。
「活動する階層が拡がっていけば、その三種だけじゃなくて、もっと多くのモンスターと戦うことになるわけだし……目の前のことばっかり見ているわけにはいかないか。
『オーク』に『ハード・アーマード』、そして『インファント・ドラゴン』。課題は山積みだけど、戦うときが楽しみね！」
「えぇ……『インファント・ドラゴン』は出現数が少ないからスルー出来ますよ？　わざわざ手強い竜種に挑むんですか？」
「そりゃあそうよ。竜に挑むは騎士の誉れだもの」
「私たちは冒険者とサポーターです。騎士じゃありません！」
「でも、竜素材を使った装備とか使いたいじゃない。ドラゴン・ウェポンよ、ドラゴン・ウェポン。浪漫に満ちてるわぁ」
頑強な鱗。強靭な生命力。逞しい剛力に、射程の広いブレス。
能力が全般的に高い竜種に隙は無く、数あるモンスターの中でも最

強と名高い。
その最強を下し、装備に変えることで、人類も竜種(最強)の力を振るうことが叶う。
想像するだに心が躍る。
いずれ黒竜を乗りこなすと豪語するフィアナだが、竜の鎧を身に纏い、竜の武器を扱うことへの憧憬の念は少なからず持っていた。
「今のフィアナ様、娯楽に耽る神様たちおんなじ顔してます」
「はぁ!? あのダメ男たちと私のご尊顔が同じってそんなことあるわけないでしょーが! 不敬罪よ、侮辱罪よ!」
「その発言がとんでもない侮辱と不敬だと思いますよ。地上ではくれぐれも、その調子で話さないようにしてください」
新階層とは思えぬ、緩やかな探索活動。よもやこの平和が嵐の前触れに過ぎず、本当の動乱が地上にて待ち受けているとは、二人は知る由もなかった。

十五話　捨てる神あれば拾う神あり

天界にて母神としての地位を確立していたレイアは、『完璧な育児』を為すために様々な技術を修得していた。

例えば、極東の武術の『摺り足』。赤子を抱きかかえたまま移動する際に、子に余計な振動を与えない歩法術として重宝する。

例えば、学問知識。子を健全かつ正しく育てるためには、まず与えるべき知識を親が獲得していなければならないだろう。

そして、調理技術。健康を維持するための栄養学を下地に、離乳食からコース料理まで古今東西の料理をマスターしている。

「レイア様、ステーキ一つ注文入りましたー！」

「はーい。それと、クリームシチューがちょうど出来たから持って行ってね」

【レイア・ファミリア】結成後、彼女は派閥の懐を潤すべく、類まれな調理の腕を活かし飲食店で働いていた。基本的には調理スタッフだが、神格破綻者の多い神々の中で、数少ない神格者でもあるので、ホールの人員が足りない場合にはそちらに回ることもある。そのたびに女神に相応しい美貌とスタイルの良さもあり、一度客前に出れば、莫大な宣伝効果を齎す。

厨房に入れば超一流の料理人。ホールに出れば話題の看板娘。

ウェイトレスの声に答える女神は、雇われてからの日の浅さに反し、即戦力として鉄腕を振るっている。

どこかから噂を聞きつけた、娯楽好きの神が店に押し掛けることもあるが、その迷惑を差し引いて尚、彼女は店の利益に大きく寄与していた。

「うーん、そろそろ眷属たちが帰ってくるから、先に上がらせて貰うわね」

「あー、もうそんな時間ですかぁ。うぅ、夕飯時をレイア様無しで凌がなくちゃならないなんて……も少しだけ残業していきません？」

「無、理。ダンジョンで頑張った子供たちに『おかえりなさい』って言ってあげたいんだもの」

「お母さんしてますねぇ」
仕事先の営業は夜間にまで続くが、朝から働いていたレイアは夕刻には抜ける。愛しい眷属を迎え、一緒に夕飯を摂りたいがためだ。
彼女の勤務時間は、早朝から夕刻まで。『朝食と夕食は必ず眷属と共に食べる』という信条のために、断固として勤務時間は曲げないし、曲げさせない。
極大戦力のリタイアを惜しむ声を聞き流し、手早く着替えを済ませて店を出る。
仕事帰りの大人たちの疲れた声。遊び疲れ、家へと向かう子供たちの夕飯を楽しみとする歓声。これからが稼ぎ時だ、と気合を入れる酒場の主人らの呼び掛け。
通りに溢れる喧騒が、等しくレイアの耳目を楽しませる。成人も幼子も、神からすれば等しく愛しい子供たちだ。彼らの日常の一片を感じ取るだけで、レイアの心には幸福の風が吹く。
「今日はどの道を使って帰ろうかしら」
アルバイト先から宿までの帰路は複数ある。最短ルートは大通りだが、敢えて細道に入ってみるのも新鮮味があって面白い。『知る人ぞ知る名店』を発見できた際の喜悦は一入だ。
レイアの退勤時間は、フィアナの帰宅時刻を見越し、更に若干の余裕を持たせている。最短最速のルートを辿らずとも、万全の構えで彼女を迎えることは可能だ。
無駄にして非効率な回り道。些細だが、女神の日々の娯楽の一つでもある。
前を見て、右を見て、左を見る。更には一応後方も確認し、進行方向を気分で決定してから歩き出す。
ただ『何となく』その方角に行けば、『良いこと』と出くわすように思えたのだ。
所謂、神の勘というものだ。勘で選んだ宿に泊まるうちに初めての眷属を得られたように、根拠が無くとも、意外と馬鹿にならない。
右へふらふら、左へふらふら。風に飛ばされる綿毛のように歩いていく。

規則性はなく、しかし迷いもない。
引き寄せられるようであり、導かれるようでもあった。
「あなた――!?」
理屈と道理を捻じ曲げて。その果てに出会いがあるのならば――人はそれを、『運命』と呼ぶのかもしれない。
場所は『ダイダロス通り』。千年も昔に奇人と称された男が造り上げ、管理機関（ギルド）も全貌を把握できず、住民でさえ迷うことがあるという地上の迷宮。スラム街としての性質も持つ、その外縁部に一人の少女が倒れ込んでいた。
衣装は黒いローブが一枚のみ。しかも、それさえボロボロにすり切れており、『ローブ』と呼べるかは怪しいところだ。
衣装が最底辺であるならば、その着用者の状態も健全とは言い難い。ローブの端から露出した、少女の体には夥しい数の傷や汚れが目立つ。
レイアが咄嗟に駆け寄り呼び掛け、肩を揺さぶるも、反応はない。少女は倒れたまま、呼吸も荒く、瞼を下ろしたままだ。
「助けないと！」
スラム街で一人倒れているボロボロの少女だ。どこからどう考えても訳ありだろう。
同じ訳ありでも、リリルカ・アーデを引き取ったときとは訳が違う。事前の調査も根回しも、何一つ行っていないのだ。派閥の地盤すら出来上がっていない【レイア・ファミリア】が抱え込んだとして、扱い切れない可能性は多分にある。
脳裏に乱舞する、懸念のすべてをレイアは放り捨てる。
危険が隠れているのだとしても、それは子供を見捨てて良い理由にはならない。賢く生きるために、子供を見捨てることは出来ない。
眷属（フィアナ）は、条理を無視してリリを救い出してみせた。ならば、彼女の主神（親）であるレイアが現実に屈するはずもなし。
眷属（子）に誇れる主神（親）であるためにも、一人の孤児を保護することを胸に誓う。

十六話　可愛いは正義

「――というわけで、この子を保護したの」
「というわけじゃなーい！　あばばばば、私のせいでレイア様がグレたー！」
宿に戻った自称未来の大英雄を出迎えたのは、敬愛する女神プラスαだった。
レイアの背に隠れた幼女が、窺うように小さく顔を覗かせる。既に風呂に入り身を清めたのだろう、くすんだ銀色の髪はしっとりと湿り気を帯びていた。
丸みを帯びた碧眼と、無垢な白肌はあどけなさを感じさせ、大変に愛らしい女児である。
なまじ容姿が優れているだけに、事情を明かされなければ、レイアは完全にアブナイ神だ。レズビアンとロリコンの二重疑惑（ダブルコンボ）を掛けられよう。
「ねえ、レイア様。ペットを飼うのとはわけが違うのよ？　私たち宿屋住まいだし……百歩譲って野良犬や野良猫は良しとしても、野良幼女て」
たまさか『幼女』が拾い物に名を連ねる日がやってこようとは、フィアナをして思いもしなかった。しかも名実ともに神格者であるレイアが拾い主だ。もはや、それだけで騒乱の種となり得る。娯楽好きの神々に知られた途端、確実にちょっかいを出されるだろう。
「でも、フィアナちゃんが私の立場だったらどうする？　きっと助けたいと思うんじゃない？」
「普通に見捨てるけど」
「思った以上にドライ！」
リリを助けるために、フィアナは全力以上の力を振り絞った。
そこまで頑張ることが出来たのは、リリが唯一の仲間であり友人であったからだ。見ず知らずの赤の他人のために東奔西走するほど、フィアナは人間が出来ているわけではない。
ジロリ、とレイアを間に挟みつつ、銀髪の幼女を睨（ね）め付ける。

「ひぅ」と短く悲鳴を零して頭を引っ込める反応は小動物そのものだ。庇護欲は唆られるが、それだけだ。爆弾と承知した上で抱え込む動機にはなり得ない。
「はぁぁぁぁ。レイア様ぁ、実際問題、うちじゃどうにもならないでしょ。【ソーマ・ファミリア】の子みたいに、力のある派閥に任せるしかなくない？」
「それは私も考えたけれど……」
銀髪の幼女に聞かせることではないと考えてか、レイアはフィアナの耳元に顔を寄せ、小声で告げる。
「生まれ育ちも分からない子を引き取ってくれる可能性は低いし、爆弾だって分かっていればこそ友神に押し付けるわけにはいかないわ」
理は適っている。フィアナだって、もしも自分が拾った厄介事を友達に押し付けて素知らぬフリをすることはない。
「友達に迷惑をかけるくらいなら自分が苦労を背負う」という思考は、神も人も変わらない。
納得と共感を示して「むむむ」と唸る幼女に、女神は畳みかける。
「そ、れ、にぃ」
レイアは反転ししゃがみ込むと、銀髪の幼女に微笑みを向けた。
「ね、ジャックちゃん。私のこと、あの素敵な名前で呼んでくれる？」
「……神様??」
「はぅ！」
小首を傾げながら紡がれた一声に、女神は陥落。胸を抑え、嬌声を上げた。
頬を上気させ、潤んだ瞳で幼女を見つめる女神の画は、煽情的だが、それ故に言い訳の余地なくアウト。レイアが手を伸ばせば、誰もが幼女の貞操の危機だと感じること間違いなし。実に犯罪的である。
たった一言で腰が砕け、俗にいう女の子座りの姿勢となったレイア。彼女は瀕死の身を推して突撃命令を下す。
「そう、私はあなたのお母さん。だからあなたより先に私の子になった、金髪のあの子は――」
「おねえちゃん？」

「んゞんゞっ！」
穢れを知らぬ純粋無垢な輝きを湛える眼差しと、舌足らずにして可憐な声が紡ぐ『姉』の一言。一人っ子が夢想する『妹』なる至高の存在がここに具現したのだ。
これぞ必中にして必殺のハートブレイクショット。
フィアナの貧相な理論武装は、一瞬のうちに貫かれてしまった。
しかし彼女は未来の大英雄。心臓を穿たれた程度で斃れるようでは、英雄になれない。不屈の覚悟で立ち向かう。
「ジャックちゃん、もう一声よ」
「おねえちゃん??」
レイアだけならば、理論武装で抗うことが出来た。
ジャックだけならば、気合と根性で耐え抜くことが出来た。
けれど、二人が手を合わせてしまったらどうしようもない。フィアナの視線の先にある、幼気な女児を誑かす魔王（レイア）の図。絶望的な光景に、小人幼女の背筋に悪寒が走った。
「おねえちゃん……」
ジャックの次の一言は消え入りそうなほどにか細かった。
歯を食い縛って耐える形相により怯えさせてしまったのだろう。理解するや、フィアナは全身が鉛と化したような罪悪感に襲われる。
それは世界が滅亡したような絶望などではない。世界を滅ぼしてでも、彼女の憂いを晴らしたいと願ってしまう。
「ジャックちゃん、これが最後（ラストアタック）の一声よ！」
「おねえちゃん！」
「ぐはぁああ!!」
英雄の心に届く声は、いつだって真摯な祈りに他ならない。力強くも澄んだ叫びが、フィアナの心を打ち崩した。
背中から「ビターン！」と音を立てて倒れ込む。完敗だ。天井を見上げる彼女の胸には、敗北による不快感さえ去来しない。蒙が啓けた爽快感だけが湧き上がる。
上体を起こし、一人と一柱を視界に入れる双眸は、青空のように澄み切っていた。主神とアイコンタクトを交わし、小さく頷く。

「姉で妹で姉妹で家族なんだから、うん、一緒に暮らすべきよ。そうじゃないとおかしいわ」
クルクルと掌が返る。フィアナの手首は回転式だったのだ。
トテトテと駆け寄り、姉(フィアナ)は親愛を込めて妹(ジャック)を抱擁する。
大きく息を吸い込み、白銀の髪の匂いを堪能。頬をプニプニと突(つつ)き、その柔らかさを肌で記憶する。互いの鼻が接触しかねない至近にて、嘗め回すように碧眼を見詰めた。
すべてが愛おしく、すべてを守りたい。
この選択の果てに、如何なる結末が待ち構えていようと悔いることはない。答えは得たのだから。
「あなたを見捨てるとかいう戯言を、どっかの馬鹿がほざいたみたいだけど、あれは私じゃないから。私たち超絶美幼女姉妹の仲を引き裂こうとする、邪知暴虐の巨悪がどこかにいるだけだから。
ほんとよ、ほんと。最初っからジャックの事を守りたいと思ってたもの。ワタシ、ウソツカナイ」